

インドネシア・バンガイ諸島サマ人の環境認識 ——外洋漁撈をめぐる魚類・漁場・目標物の民俗分類——

中野真備*

The Ecological Cognition of Sama-Bajau People in the Banggai Islands, Indonesia: Indigenous Classification of Fish, Fishing Grounds, and Landmarks of Outer Sea Fishing

NAKANO Makibi*

Abstract

This paper examines the ecological cognition of Sama-Bajau fishermen by analyzing the naming of fish, fishing grounds, and landmarks used by those who engage mainly in open-sea fishing in the Banggai Islands, Central Sulawesi, Indonesia. The field survey assumed that reef rocks and celestial bodies are landmarks used only by Sama-Bajau fishermen because their Sama-Bajau names have been shared among the fishermen until the present day along with their detailed origins. Compared to these landmarks, capes and bays are spread over relatively long distances, so minute differences are difficult to discern. Sama-Bajau fishermen have an equal interest in the names of capes, bays, and reef rocks. The study also clarifies that the background to the naming and folk taxonomy of landmarks is related to differences in the appearance of landmarks and living spaces used by Sama-Bajau and non-Sama-Bajau groups. Therefore, folk taxonomies attract greater and lesser interest or an intermediate level of interest. The study clarifies that Sama-Bajau folk taxonomies have similar features to landscape recognition from a fisherman's perspective. This is the first attempt to comprehensively classify fish, fishing grounds, and targets based on indigenous knowledge of the sea.

Keywords: open-sea fishing, ecological cognition, landscape, Sama, Bajau, Banggai Islands, folk term, folk taxonomy

キーワード：外洋漁撈, 環境認識, 景観, サマ, バジャウ, バンガイ諸島, 民俗語彙, 民俗分類

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 日本学術振興会特別研究員 (DC) ; JSPS Research Fellow, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University, 46 Shimoadachi-cho, Yoshida, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, Japan
e-mail: maknaknet1@me.com
DOI: 10.20495/tak.58.2_164

I はじめに

本稿の目的は、インドネシア・バンガイ諸島でももに外洋漁撈をおこなうサマ（バジャウ）人漁師たちによる、魚類・漁場・目標物¹⁾への命名方法（nomenclature）と民俗分類（folk taxonomy）を分析することで、彼らの環境認識の一端を明らかにすることである。従来の認識人類学や民俗分類学では、魚類の分類や空間認識が個別に分析されることがあったが、本研究はこれらを総合的に分析することにより、命名行為における自然物と空間の相互作用を論じる。

漁撈活動をおこなう場所の景観について、漁師の視点から考えてみたときに、少しく沖へ漕ぎ出せば、360度地平線が広がり、容易に鳥影を失い、自分がどこにいるのかも分からなくなるような海域の漁場が「開放系漁場」[灰谷 2009]であるとすれば、周囲を鳥影や陸地に囲まれる海域の漁場は「閉鎖系漁場」[灰谷 2011]といえる。いずれの漁場においても、人間が自然環境を利用し、効率的に漁撈活動をおこなうためには、対象の漁獲物についての知識と、漁場へ到達するための技術が求められる。

自然を生きるための技術や技能のうち、もっとも基本的な技術のひとつとして命名行為が挙げられる。人間が命名をおこなう場合、そこには人間が自然をどのように認識し、利用してきたかということが、自然物の民俗語彙としてあらわれる。

したがって、自然物の民俗語彙やその分類は、人びとの環境認識と密接な関係があるといえる。たとえば魚の民俗分類は、人が自然界の存在である魚に対して、恣意的な意味付け [秋道 1984: 79]をおこなうことである。そうした恣意性のなかに、内在する文化の特性や価値の体系をみることができる。

人間が自然環境に向けるまなざしは、本人ですら自覚していない認識であることが多い。そこで有用なのは、文化をその内側から記載し、文化をひとつの知識の体系と見なし、これによって精神にかかわる知識の体系を明らかにする認識人類学 [松井 1983: 308-309]の手法である。特に、言語を切り口として文化の内側を描き出そうとする姿勢について、松井は「発話や文章のように言語活動の表面に現れるものではなく、そうした発話や文章を作り出す文法という精神的で知的な機構を探る」と表現している [同上書: 309]。このアプローチによって、自然物への命名や分類に内在する、人間の環境認識をはじめて見出すことができるのである。²⁾

1) ここでいう目標物とは、漁撈のために海上を運行する際に、自船や目的地の位置を把握するために目印として利用する自然物や人工物のことをいう。

2) 松井 [1983] は、自然認識についての人類学的研究の課題について、「それぞれに異なる自然環境のもとに生活する人々が、彼らをとるまく自然をどのように認識しているのかを明らかにすることを目指すものだ」[松井 1983: 275]としている。また、認識人類学の立場では、「文化をその内側から記載」[同上書: 308]すること、「文化をひとつの知識の体系であるとみなす」[同上書: 309]ことによって、「精神にかかわる知識の体系を、物質的な事象、すなわち言葉や物を手掛かりにして明らかにしていこうとする」[同所]ものだとしている。ここに人類学的研究や、言語学的研究とは異なる、認識人類学の独自性がある。

これまでの民俗分類を対象とした認識人類学のアプローチでは、特定の名称体系に対して、資料の系統的な収集と民俗分類体系の抽出を通じて、民俗分類体系の普遍性やその進化を論じることを目指していた [同上書]。もとより民族動物学や民族植物学などの研究分野において、民俗分類はひとつの研究分野として定着しつつあった。そのなかで、ある民族集団のもつ民俗分類体系を独自性のある分野として確立させたのは、フィリピン・ミンドロ島で焼畑耕作をおこなうハヌノ族による植物の民俗分類について、語彙素分析という言語学的手法を援用した、コンクリン [Conklin 1962] の功績が大きい。さらにバーリンは、ひとつひとつの方名に着目して、その語彙としての性質を分類する、普遍的な方法 (バーリン・システム) を提唱した [Berlin 1972]。普遍的な方法論を確立することにより、分類体系をそれぞれ別の社会からとり出して、それらを相互に対照させ、比較することを可能にした。

しかし、同一言語の社会には、たとえば自然環境についての名称体系に限定しても、魚類や空間など、様々である。このような異なる名称体系どうしの関係性については、十分に議論されておらず、普遍的な方法論なども確立されていない。本研究では、こうした課題を受けて、ひとつの地域で同一の言語を話す人びとが認識する、魚類・漁場・目標物という異なる3つの名称体系を扱い、その相互作用を分析する。これらの名称体系はいずれも漁撈というひとつの行為に紐づけられることから、従来のアプローチでは捉えきれなかった、総合的・動的な環境認識に接近することができるのである。

自然物への命名や分類から環境認識を見出そうとする研究には、魚介や植物など自然物に対する命名行為に着目した研究 [福井 1991; 後藤 1999; 松井 1989; 崎山 1999; 高橋 2014; 安室 2014] だけでなく、水田や畑など空間に対する命名行為に着目した研究 [今里 2011; 香月 2000; 関戸 2000] も含まれる。インドネシアを対象とした研究についていえば、鳥類への命名から社会文化的な役割を論じた民族鳥類学的研究 [Forth 2004; 2016; Mulyanto *et al.* 2020] や、マンゴーの民俗分類と植物学的分類の比較 [Ueda *et al.* 2016]、サゴヤシの民俗分類に基づく民族植物学的研究 [Ellen 2006]、コミュニティや世代ごとに植物の方名の習熟度を分析したもの [Hidayati *et al.* 2017]、海洋動物への命名と階層的分類の分析 [Moesinger 2018] などが挙げられる。海を対象とした研究について、近年では、海洋保護や資源管理の観点から、あるいは国家海事事業の推進のための若年層の教育といった点から、特に魚類の方名について報告されることがある [Irawan and Muhartati 2019; May 2005]。在地の海洋資源管理や保有権についても、オセアニアやインドネシア東部地域を中心に報告があり、このなかで在来の漁場名や海域区分にもふれられてきた [Akimichi 1991; Iwakiri and Mantjoro 1992; Mantjoro and Akimichi 1996; Sudo 1984]。しかし、これらのいずれにおいても、特定の生物種や空間の民俗分類体系が個別に抽出され、研究対象として論じられる傾向があり、体系同士の相互作用や、複数の民俗分類体系を総合的に論じた研究は多くない。漁撈で利用される目標物を対象とした研究としては、アマレルによ

る天体知識の報告がよく知られている [Ammarell 1999; 2002; 2008; Ammarell and Tsing 2015]。

自然物への命名行為から人間の環境認識を捉えようとした研究は、以上のように少なからぬ蓄積があるが、これらには大きく2つの限界がある。

第一には、自然物と空間を切り離して民俗分類を捉える傾向があることである。人間が自然環境をどのように認識しているかという大きな問いに対して、民俗分類の一側面のみを切り取るだけでは、人間の環境認識の全体像を捉えきることはできない。人間が自然を利用して生業を営む場合、対象の、あるいは漁撈のルート上の自然物の特徴についての知識と、利用する空間の特徴についての知識の両方が必要となる。たとえば植物を採集する場合、対象とする植物の色彩や形質、有用性の知識やそれに基づく地名に加えて、その生息場所を熟知している必要がある。漁撈をおこなうためには、対象の魚種についてだけでなく、漁場の海底微地形の特徴や、漁場に到達するための景観を記憶している必要がある。このように、人がどのように環境を認識し利用しているかということをひとつの生業活動の流れを通して考えると、自然物と空間は切り離して考えることはできない。しかし、これまでの研究においては、空間分類の研究と、自然物への命名の研究は、ほとんど分断されており、ひとつの生業活動にかかわる民俗分類として統一的に捉える研究はおこなわれてこなかった。

第二には、空間分類の研究における学問的関心の偏りが指摘できる。空間分類に着目した研究対象は、農山漁村の集落内部における微細地名の研究 [今里 2011; 香月 2000; 関戸 2000] が中心であった。海の空間分類に関する研究がなかったわけではないが、対象とされる空間は限られていた。たとえば漁場の研究については、岩場や岩礁など海岸部の通称名の研究 [篠原 1995; 上野 2004] が盛んにおこなわれてきたが、海の空間分類とはいっても、その対象空間は陸の延長線的な範囲を出るものではなかった。これは、漁場の地理空間へ着目した研究が、そもそもイソのような沿岸部における漁撈活動に集中していることに起因している。また、海底微地形の詳細な分類や命名のあり方に学問的関心が集中し、実際にそうした知識がどのように運用され実践的な技術となり得るのかといった研究は見落とされてきた [高橋 2004]。陸上の地理空間を対象とした場合、海の地理空間と大きく異なることは、実際に人間が歩いて観察し、認識することができるという点である。他方、海の地理空間とは、陸上あるいは海上からの遠景として捉えられるものである。したがって、景観の認識方法には大きな隔たりがあり、海で生活をする人びとと、陸で生活する人びとの環境認識は大きく異なるはずである。

一方、外洋での漁撈活動を対象とした研究では、船上におけるヤマアテのみが空間認識として扱われてきた [中野泰 2003]。ヤマアテ、またはヤマタテとは、「海上で働く人々が陸地の景観を利用して自船の位置を特定する方法」 [卯田 2000: 754] のことをいう。ヤマアテの研究では、目標物として利用される陸地の景観——たとえば特徴的な山、島影、岬、岩礁など——と、目的地である漁場が、どのように直線上に配置されて理解されているか [安室 2013] という問

いなどが主な関心であった。しかし、実際の漁撈では、ヤマアテのみならず、多くの目標物・景観から情報を得ながら海上を運行していることが少なくない。たとえば、夜間に船を進める場合には、天体を目標物として自船の位置を知る方法であるスター・ナビゲーション [秋道 1985; 須藤 1992] などの技術があり、昼間帯にはヤマアテの利用に切り替えるというふうに、いくつかの位置特定技術を組み合わせている例がある [中野真備 2018; 2019]。

このように、空間分類の研究で見落とされてきた外洋漁撈は、実際には複数の自然物を認識し、利用しているにもかかわらず、一部の認識方法のみが抽出され、着目されてきた。

サマ人の環境認識に関する先行研究についていえば、カシノ [Casino 1976] やセイザー [Sather 1997] が挙げられ、セイザーは、漁場や季節区分、潮汐などのサマ語名や分類を詳細に記している。さらに近年では、海洋保護の研究において民俗分類や方名に言及する研究もみられる [May 2005; Stacey *et al.* 2012]。

しかし、これらはいずれも、サンゴ礁域の卓越した海域のような、ある特定の共通した環境条件の地域であり、サマ人としてはあまり研究報告のない、外洋漁撈をおこなうバンガイ諸島のような地域は含まれていない。あるいは、人類学的な報告の一部として、サマ語名の情報が付される程度である [Kemkens 2009]。したがって、従来のアプローチをそのまま援用するだけでは、サマ人が自然環境をどのように認識しているかという大きな課題を捉えきることができない。

そこで本研究では、バンガイ諸島で外洋漁撈をおこなうサマ（バジャウ）人の環境認識を、魚類・漁場・目標物の命名行為と民俗分類の分析から考察する。これは、人間が、自然に対して恣意的な意味づけをおこなうことで形成してきた文化を、内側から捉えるものであり、人類はどのように自然と関係を構築してきたのかという、普遍的な問いの核心に迫るものである。

バンガイ諸島は、見渡せば多数の小島がある「閉鎖系漁場」[灰谷 2011] であること、漁師が出漁中の移動時間は昼間帯だけでなく夜間帯にもあること、などの特徴がある。このことは、時間帯の制約があるスター・ナビゲーションやヤマアテのように、特定の民俗技術だけに特化しているのではなく、様々な種類の目標物を利用して漁がおこなわれていることを示唆している。

バンガイ諸島のサマ人漁師について筆者は、外洋漁撈に必要な海底微地形の知識、季節や在来の暦といった時間認識を通して、漁撈知識が適応的であることを明らかにしてきた [中野真備 2019; 2020]。本研究は、このようなサマ人による魚類、漁場、目標物の命名と分類を明らかにすることから、彼らの環境認識の全体像を捉えることに特徴がある。

II サマ（バジャウ）人

東アジアおよび東南アジアの島嶼部沿岸地域には、漁撈を営み、船上生活をおくる集団がある。東南アジア島嶼部には、海洋志向の強い民族集団がいくつか存在する。そのうちサマ（Sama）あるいはバジャウ（Bajau, Badjau, Bajo など）とよばれる民族集団は、インドネシア東部、マレーシア・サバ州、フィリピン南部を中心に分布しており、広域に拡散している点に特徴のある海洋民である。³⁾

このうちサマ人を対象とした研究は、フィリピン南部からサバ州東北端にかけてのスル諸島周辺域を中心に蓄積されてきた。サマ人は船上居住と移動性の高い生活形態から、「海の遊牧民（sea nomads）」、「海のジプシー（sea gypsy）」などと呼ばれ、東南アジア諸国の他の民族集団とあわせて「漂海民」と総称されることもある。しかし、近代化とともにサマ人の伝統的な生活様式は変容しつつある。現代、彼らは家船（住居を兼ねる小型の舟）には居住せず、浅瀬や陸地に家屋をもつようになり、もはや今日のサマ人に「漂海民」と呼ぶべき集団はいないとすらされている。

このような変化がありつつも、サマ人はかつての移動生活を背景として、現代でもフィリピン南部からマレーシア・サバ州、インドネシア東部地域に至るまで広く分布しており、彼らの独自の海域ネットワーク上では、ヒトやモノが動き続けている [長津 2018]。船上居住ではなくなったものの、サマ人の生業は依然として漁撈がその中心にあり、海上交易や海産物の加工もおこなわれる。

サマ人について、本稿では「サマ諸語⁴⁾」を日常的に話し、一般に自らをサマと名乗る人々 [長津 2012] とする。「サマ」は自称、「バジャウ」は他称とされているが [床呂 1992; Nimmo 1968]、先行研究においては、「バジャウ」表記のほうが定着している。しかし本稿で対象とするインドネシア・中スラウェシ州のサマ人は、「バジャウ」は他民族からの他称であり、自身

3) 3カ国に居住するサマ人は、スルー系サマ人、スラウェシ系サマ人、サバ西岸サマ人、ヤカン人、アバクノン系サマ人の5集団に大きく分類される [長津 2009]。これらはサマ語の語彙や方言の調査がもとになっている。ただし、グライムらによる調査では9分類であった言語を、それぞれ分割・統括し、スルー系サマ人はパラギギ・サマ語、スルー中部サマ語、スルー南部サマ語、バグタラン・サマ語、マプン語の話者を一括し、スラウェシ系サマ人はスラウェシ系サマ語、サバ西岸サマ人はサバ西岸系バジャウ語、ヤカンはヤカン系サマ語、アバクノン系サマ人はアバクノン系サマ語の話者というように分類される [Grimes and Grimes 2000]。これらのうち本研究の対象は、スラウェシ系サマ人とされる人びとのうち、スラウェシ島東岸部のバンガイ諸島に集住する集団である。

4) 本稿中で扱うサマ語の表記は、原則として長津 [1997] に準拠した。ただしバンガイ諸島で用いられる一部のサマ語語彙に関しては、バンガイ諸島のサマ語の発音に準じた表記法を採用する場合もある (例：トゥコーなど)。軟口蓋鼻音は ng、声門閉鎖音は q で記し、反復の形態をとる語彙は [-] でつなぐものとする。また、インドネシア語とサマ語をアルファベット表記する際は、一般的なインドネシア語の地名 (例：スラウェシ州、バンガイ諸島など) を除き、斜体とする (例：*lana*, *pangiri* など)。サマ語をカタカナで表記する一般的なルールは存在しないため、筆者ができる限りバンガイ諸島のサマ語の発音に近いカタカナ表記をあてる。

をあくまでサマと自称する。そのため本研究では、研究対象の住民の自己認識に従い、民族集団の表記はサマ（人）に統一する。

サマ人が海を利用して生計を立ててきたことは一般的にもよく知られているにもかかわらず、サマ人漁撈活動や環境認識にふれた研究は多くない。セイザーによるサバ州南東部のサマ人の漁法についての研究 [Sather 1985]、長津や中野によるサマ人の漁撈活動と海の空間認識についての研究 [長津 1997; 中野真備 2020]、小野によるボルネオ島東岸域のサマ人の漁撈活動を過去と現在で比較した研究 [小野 2011] のみがあり、そのなかでも漁撈活動に議論の基軸をおいている点では、長津と小野による研究が代表的である。サマ語の言語学的研究としてはいくらかの蓄積がある [Akamine and Nagatsu 2007; Pallesen 1985; Youngman 2005]。魚類についてのサマ語方名の研究についていえば、赤嶺がサマ語方言の多地域間比較を目的として、魚介類について約40例の語彙を指標として用いている [Akamine 1997] が、大部分が包括名である。長津 [1997] は117例、小野 [2011] は195例と、包括名・個別名を含めて多くの方名を記録しているが、いずれも方名の資料としての記録に留まり、具体的な分析はおこなわれていない。また、漁場や目標物など、特定の空間や自然物に対しての命名行為の具体的な事例については、インドネシア、フィリピン、マレーシア3カ国のサマ研究全体をみても報告がない。なかでもバンガイ諸島周辺のサマ人についての研究蓄積はほとんどない。本研究で対象とする地域は、このようにサマ研究における空白地帯ともいえる。

III 調査地域と調査方法

1. 調査地域

現地調査をおこなったK村は、インドネシア東部に位置する、中スラウェシ州バンガイ諸島県の行政村落である。人口3,793人、1,010世帯（2017年K村役場提供）のうち、大多数をサマ人が占める。バンガイ諸島内で最大の面積であるベレン島の東岸の湾に、K村は位置する。周辺はマングローブを含む汽水域と、干潮時に一部が海面から露出する砂泥地があるばかりで、サンゴ礁はほとんどみられない。湾を越えるとすぐに深い外洋域となる。K村の集落の約半分は陸上の家屋であり、その他は海上の杭上家屋と、サンゴ石灰岩を積み上げた人工島に築かれた家屋である。バンガイ諸島の島々は石灰質の土壌で [Whitten *et al.* 2012]、K村の陸側集落も、すぐ背後に石灰質の岸壁が迫っている。

K村の住民らによれば、かつては外洋の手前に小さいながらもサンゴ礁域があったが、ダイナイト漁によって破壊しつくしたという。先行研究におけるサマ人は、サンゴ礁域が主な生活空間であるものの、K村のように、サンゴ礁がほとんどないところで生活し、漁撈活動としてもサンゴ礁をほとんど利用しないサマ集団についての研究はほとんどない。

K村の漁撈活動は主に外洋でおこなわれる。外洋漁撈で利用される漁場は少なくとも29カ所が確認されている [中野真備 2020]。いずれの漁場も、バンガイ諸島周辺海域に限られており、ほとんどの漁撈は遠くには島影が見える程度の航行ルートでおこなわれる。

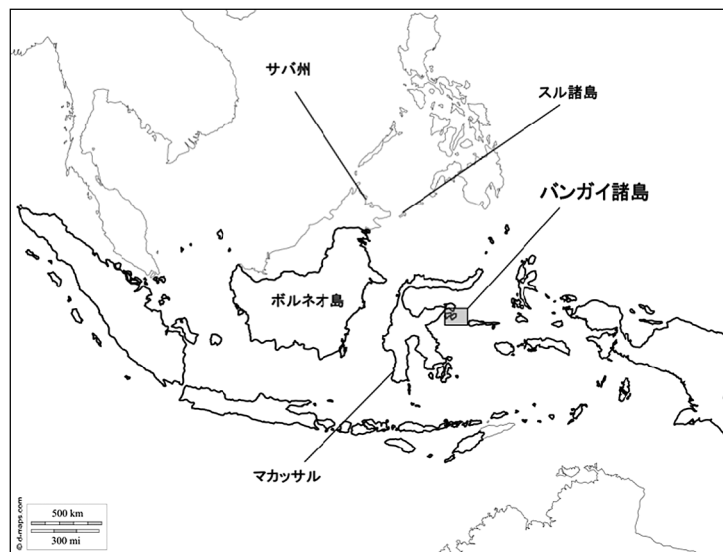


図1 バンガイ諸島とスル諸島周辺海域の位置関係

出所：d-maps.com に筆者加筆。



写真1 K村から南方漁場へのルートの眺望 (2017年9月13日に筆者撮影)

2. 調査方法

2017年から2019年にかけて断続的に計約9カ月間の現地調査をおこなった。聞き取り調査では主にインドネシア語を用い、適宜サマ語を併用したほか、引退した元漁師Pがインドネシア語とサマ語の通訳をおこなった。

漁撈活動についての調査は、主な漁法をすべて含むよう配慮しつつ、各漁法の漁師のうち、漁師間で「海をよく知っている」とされる漁師を中心に15名⁵⁾を対象として聞き取った〔同上論文〕。GPS (Global Positioning System: 全地球測位システム) を用いた漁撈ルートの追跡調査もおこなった。

魚類の方名についての調査は、雌雄を区別したカラー図絵と英語標準名を掲載した図鑑〔Lieske and Myers 2002〕を見せて、それぞれの魚について計3名(漁師A, 漁師F, 漁師O)から聞き取りをおこなった。この他に、市場や船で実際に確認できた魚について、その方名を聞き取った。なお図鑑に掲載されたもののうち、明らかにバンガイ諸島周辺には生息していない種について方名が挙げられた場合には、漁師による同定に何らかの誤りがあると考えて、学名を記載することせず、参考としてサマ語のみを記す。この際、魚種の生息地については、FishBase〔FishBase online〕を参考にした。学名と標準和名の対応は、『日本近海産貝類図鑑〕〔奥谷 2000〕および『日本産魚類大図鑑《図版》〕〔益田ほか 1984〕、『食材魚貝大百科〕〔多紀ほか 2000〕を参考にした。

また、実際に確認して写真を撮ることができたものについては、魚類の専門家である岩田明久氏(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科名誉教授)に依頼して同定⁶⁾をおこなった。

漁場および目標物については、協力者の漁師3名(漁師A, 漁師F, 漁師O)から聞き取った。漁場および目標物については、GPSを持って出漁した漁師に対し、翌日に漁場と出漁ルート、利用した目標物を聞き取る形で調査をおこなった。そのほかに、K村周辺の地図を見せて、岬や湾など連続する目標物について暗誦してもらった。漁師間で回答が異なることはほとんどなかったが、異なった場合には最も支持者の多い回答を採用した。

5) 対象となった15名の漁師の内訳については、〔対象者〕推定年齢、家族人数、主な漁法、その他の漁撈活動の順で、次の通りである。◎ [A] 50歳, 5人, 釣り漁(手釣り・擬似餌), 延縄漁(魚), [B] 45歳, 3人, 釣り漁(手釣り・擬似餌), [C] 39歳, 5人, サメ延縄漁, 網漁(刺し網), [D] 38歳, 5人, ダイナマイト漁, [E] 49歳, 6人, 釣り漁(手釣り・擬似餌), ◎ [F] 58歳, 3人, 釣り漁(手釣り・擬似餌), [G] 62歳, 3人, 素潜り漁(棒突き・捕獲), 釣り漁(手釣り・擬似餌), [H] 48歳, 7人, 網漁(刺し網), [I] 70歳, 2人, 網漁(刺し網), [J] 32歳, 4人, 素潜り漁(棒突き・捕獲), [L] 29歳, 4人, 素潜り漁(棒突き・捕獲), [M] 50歳, 6人, 釣り漁(手釣り・擬似餌), [N] 40歳, 4人, 釣り漁(擬似餌), ◎ [O] 45歳, 7人, 素潜り漁(棒突き・水中銃), 釣り漁(擬似餌)。うち◎印のある3名は、魚類・漁場・目標物の聞き取り調査の対象者である。対象者Aと元漁師PはK村内の漁師のなかでも特に「海をよく知っている」とされ、元漁師Pが引退するまでは2人で出漁していた。

6) 同定には、*Southeast Asia Tropical Fish Guide*〔Kuitert and Debelius 1994〕および『日本産魚類検索 第三版〕〔中坊 2013〕が使用された。

IV 魚類・漁場・目標物の命名方法

1. 漁撈活動

K村のサマ人による漁撈活動では、網漁、ダイナマイト漁、延縄漁を含む釣り漁、素潜り漁が確認された。これらは、対象魚種や漁具によってさらに区別される（表1）。主な漁法のほかに、採貝や魚類の蓄養、海藻養殖もみられた。K村における漁法の詳細は、中野真備 [2020] を参照されたい。

表にあるとおりK村の漁撈活動に特徴的な点は、漁法がいずれも外洋でおこなわれることにある。これは、サンゴ礁域における多彩な漁法による沿岸性漁撈 [小野 2011] が特徴とされてきた先行研究のサマ人とは、対照的である。したがって、K村のサマ人漁師が出漁中に視認する景観は、立って歩けるようなサンゴ礁の浅瀬やイソで活動する漁師の視認する景観とは、大きく異なるのである。

2. 魚類の命名

K村の漁師が把握している魚類の方名について、ここにはエイやサメを含めて、330個の方名が採集された（表2）。

K村で使用されるサマ語の統辞規則について述べておきたい。サマ語は、インドネシア語と同様に、後ろの語が前の語を形容する形で接続する。たとえば、「白い・服」と表現する場合には、「バドゥ・ポテ *badu pote*（服・白）」となる。

表1 バンガイ諸島K村のサマの漁撈活動

漁法		利用空間
網漁	刺し網漁	外洋や島沿岸部、浅瀬
釣り漁	手釣り	外洋
	擬似餌を使った手釣り（魚）	外洋
	擬似餌を使った手釣り（タコ）	外洋
	延縄漁（サメなど大型の獲物）	外洋
	延縄漁（小型の獲物）	外洋
素潜り漁	棒突き	外洋
	水中銃+鉛	外洋
	捕獲	外洋
ダイナマイト漁		外洋、島沿岸部
採集（貝類）		マングローブ域、浅瀬
海藻養殖（アガルアガルの栽培）		浅瀬
蓄養（活魚の養殖）		集落内、旧集落跡地

出所：現地調査より筆者作成。

表2 K村の漁撈で利用される魚種および生物種

大分類	上位包括名	下位包括名	個別名	語彙素	学名	和名	観察	
							確認	同定
<i>suntun</i>			<i>kenda</i>	第一次・ 単一	<i>Uroteuthis</i> sp.	ケンサキイカ属の一種	○	
			<i>kalabutang</i>	第一次・ 単一	<i>Sepioteutbis lessoniana</i>	アオリイカ	○	○
<i>quitta</i>		<i>quitta</i>		第一次・ 単一	<i>Octopodidae</i>	マダコ科の一種	○	
<i>pai</i>			<i>pai mano</i>	第二次	<i>Aetobatus narinari</i>	マダラトビエイ		
			<i>pai kiampou</i>	第二次	<i>Taeniura lymma</i> , <i>Dasyatis kuhlii</i>	マドラエイ, ヤッコエイ		
			<i>pai andaramang</i>	第二次	<i>Mobula</i> spp.	トビエイ科の複数種		
			<i>pai tangoloh</i>	第二次	<i>Taeniura melanospilos</i>	マドラエイ	○	○
			<i>pai rarang</i>	第二次	<i>Himantura uarnak</i>	ヒョウモンオトメエイ		
			<i>pai sunsun</i>	第二次	<i>Rhinoptera javanica</i>	ウシバナトビエイ		
			<i>pendoh</i>	第二次		サカタザメ科の一種		
			<i>pai mondo</i>	第二次		アカエイ科の一種		
			<i>saranga</i>	第一次・ 単一	<i>Manta birostris</i>	オニイトマキエイ		
			<i>tompah</i>	第一次・ 単一	<i>Aetobatus narinari</i>	マダラトビエイ		
			<i>sambang</i>	第一次・ 単一		トビエイ科の一種		
			<i>pepasa</i>	第一次・ 単一		エイ目の一種		
	<i>kareo</i>			<i>kareo mangali</i>	第二次	<i>Galeocerdo cuvier</i>	イタチザメ	
<i>nunah</i>				第一次・ 単一	<i>Rhynchobatus djiddensis</i>	トンガリサカタザメ		
			<i>bingkoh</i>	第一次・ 単一	<i>Sphyrna mokarran</i>	ヒラシユモクザメ		
			<i>lahuu</i>	第一次・ 単一	<i>Carcharhinidae</i> spp.	レモンザメ, ネムリブカ		
			<i>tarang tikoloq</i>	第一次・ 複合		シユモクザメ科の一種, メジロザメ科の複数種		
			<i>tungang</i>	第一次・ 単一	<i>Carcharhinus melanopterus</i>	ツマグロ		
			<i>simbroh</i>	第一次・ 単一		メジロザメ科の一種		
			<i>raro</i>	第一次・ 単一	<i>Carcharhinus albimarginatus</i>	ツマジロ		
			<i>ngurape</i>	第一次・ 単一	<i>Carcharhinus longimanus</i>	ヨゴレ		
			<i>antugang</i>	第一次・ 単一		メジロザメ科の複数種		
			<i>panuhu</i>	第一次・ 単一	<i>Carcharhinus falciformis</i>	クロトガリザメ		
			<i>kareo meo manissaq</i>	第二次 第一次・ 単一	<i>Orectolobus</i> spp.	オオセ属の複数種	○	○
			<i>manawang</i>	第一次・ 単一		テンジクザメ目の複数種		
			<i>balidang</i>	第一次・ 単一	<i>Stegastoma fasciatum</i>	トラフザメ		
			<i>dede</i>	第一次・ 単一	<i>Rhincodon typus</i>	ジンベエザメ		
			<i>baluju</i>	第一次・ 単一				
			<i>kareo panawan</i>	第一次・ 複合				
		<i>binko</i>	第一次・ 単一		シユモクザメ科の複数種			

表2 続き

大分類	上位包括名	下位包括名	個別名	語彙素	学名	和名	観察	
							確認	同定
ndoh			tokke	第一次・単一	<i>Hemiscyllium</i> spp.	モンツキテンジクザメ属の複数種		
			keramba	第一次・単一	<i>Chiloscyllium</i> spp.	テンジクザメ属の複数種		
			kareo batu	第二次		(ネムリブカ)	○	△
			ndoh	第二次	<i>Gymnothorax</i> spp. <i>Myrichthys</i> spp.	ウツボ属の複数種		
			ndoh kuneh	第二次	<i>Rhinomuraena</i> sp.	ハナヒゲウツボ属の一種		
			ndoh abu	第二次	<i>Echidna</i> sp., <i>Enchelycore</i> sp.	アラシウツボ属, トラウツボ属の複数種		
			ndoh bitte	第二次	<i>Echidna</i> spp., <i>Enchelycore</i> spp.	アラシウツボ属, トラウツボ属の複数種		
			ndoh sillah	第二次		ウツボ科の複数種		
			ndoh pangangwang	第二次	<i>Gymnomuraena zebra</i>	ゼブラウツボ		
	dayah	boneon	kiaju	lankoe	第一次・単一	<i>Cheilinus undulatus</i>	メガネモチノウオ	
kiaju talunsoh				第二次	<i>Cromileptes altivelis</i>	サラサハタ		
kiaju tubbo mano				第二次	<i>Cephalopholis</i> sp.	ユカタハタ属の一種		
kiaju loong				第二次	<i>Cephalopholis</i> sp.	ユカタハタ属の一種		
kiaju talloh				第二次	<i>Anyperodon leucogrammicus</i>	アズキハタ		
kiaju badu kaos				第二次	<i>Cephalopholis boenak</i>	アオスジハタ		
tanggoloh				第一次・単一	<i>Cephalopholis formosa</i>	ユカタハタ属の一種		
kiaju palea				第二次	<i>Cephalopholis cyanostigma</i>	ユカタハタ属の一種		
kiaju kukku mireh				第二次	<i>Cephalopholis sonnerati</i>	アザハタ		
kiaju tangoloh				第二次	<i>Epinephelus cyanopodus</i>	マハタ属の一種		
kiaju subbo				第二次	<i>Epinephelus</i> spp.	マハタ属の複数種 (ニジハタ)	○	△
kiaju bunga baru				第二次		マハタ属の一種		
kiaju karambaq				第二次	<i>Epinephelus striatus</i>	マハタ属の一種		
kiaju kabah				第二次	<i>Epinephelus morio</i>	マハタ属の一種		
kiaju tonku				第二次		ユカタハタ属の複数種		
kiaju mireh				第二次	<i>Cephalopholis</i> spp.	ユカタハタ属の複数種	○	
kiaju kkouaq				第二次		ユカタハタ属の一種		
kiaju igah				第二次	<i>Cephalopholis</i> sp.	ユカタハタ属の一種		
gutilah				第一次・単一				
					kiaju bittekang	第二次		
		kiaju kukku	第二次	<i>Cephalopholis</i> sp.	ユカタハタ属の一種	○	△	
balembang			bangullus	第一次・単一	<i>Albula glossodonta</i>	ソトイワシ属の一種		
			bandah	第一次・単一	<i>Elops saurus</i> , <i>Chanos chanos</i>	カライワシ属の一種, サバヒー		
			balakebo	第一次・単一	<i>Albula vulpes</i> , <i>Megalops cyprinoides</i>	ソトイワシ, イセゴイ		
			balambang	第一次・単一	<i>Hyporhamphus affinis</i>	サヨリ科の一種		
			tampai	第一次・単一	<i>Hemiramphus far</i>	ホシザヨリ		
bubala			lamuru	第一次・単一	<i>Carangoides ruber</i>	ヨロイアジ属の一種		
			mangali	第二次	<i>Carangoides</i> spp., <i>Gnathanodon speciosus</i>	ヨロイアジ属の複数種, コガネシマアジ		
			landia	第一次・単一	<i>Carangoides fulvoguttatus</i>	ホシカイワリ	○	

表2 続き

大分類	上位包括名	下位包括名	個別名	語彙素	学名	和名	観察	
							確認	同定
			<i>kalanpeto</i>	第一次・ 単一	<i>Carangoides orthogrammus</i>	ナンヨウカイワリ		
			<i>bukulang</i>	第一次・ 単一	<i>Seriola dumerili</i> , <i>Seriola rivoliana</i>	カンパチ, ヒレナガカン パチ		
			<i>mamuru</i>	第一次・ 単一				
			<i>bubala batu</i>	第一次・ 単一	<i>Caranx</i> sp.	ギンガメアジ属の一種		
			<i>dayah nyubbaq nyulloh ingatang</i>	第二次	<i>Caranx</i> sp.	ギンガメアジ属の一種	○	
			<i>dayah nyubbaq pote</i>	第一次・ 単一				
			<i>dayah nyubbaq pote</i>	第二次				
	<i>pogo</i>		<i>ampala mayoh</i>	第二次	<i>Melichthys niger</i>	ソロイモンガラ		
			<i>pogo momi</i>	第二次	<i>Melichthys</i> spp.	ソロイモンガラ属の複数種		
			<i>ampala kubah</i>	第二次	<i>Pseudobalistes</i> spp., <i>Balistoides conspicillum</i>	キヘリモンガラ属の複数種, モンガラカワハギ		
	<i>pogo</i>		<i>ampalaq</i>	第二次	<i>Sufflamen fraenatus</i>	メガネハギ		
			<i>ampalaq gileh</i>	第二次	<i>Abalistes stellatus</i>	オキハギ		
			<i>ampalaq ladeh</i>	第二次	<i>Balistes</i> spp., <i>Canthidermis sufflamen</i> , <i>Aluterus scriptus</i> , <i>Aluterus schoepfi</i>	ケシヨウカワハギ属の複数種, アミモンガラ属の一種, ウスバハギ属の一種		
			<i>ampalaq ladeh</i>	第二次	<i>Canthidermis maculatus</i>	アミモンガラ		
	<i>pogo loong karupu</i>		<i>pogo loong karupu</i>	第二次	<i>Odonus niger</i>	アカモンガラ	○	△
			<i>pogo pote epe</i>	第一次・ 単一	<i>Rhinecanthus</i> spp.	ムラサメモンガラ属の複数種		
			<i>pogo pote epe</i>	第二次	<i>Sufflamen bursa</i>	ムスメハギ		
			<i>pogo pote epe</i>	第一次・ 単一		カワハギ科の総称		
	<i>tatape</i>		<i>tatape</i>	第二次		カゴカキダイ亜科, チョウチンウオ科, キンチャクダイ科, ツノダン科, ニザダイ科の複数種		
			<i>tape lamaanjoh</i>	第二次	<i>Heniochus acuminatus</i> spp., <i>Zanclus cornutus</i>	ハタタテダイ属の複数種, ツノダン		
			<i>tape bulan</i>	第二次				
			<i>tape kuneh</i>	第二次				
			<i>tape igah kiddoh</i>	第一次・ 単一	<i>Acanthurus</i> spp.	クロハギ属の複数種		
			<i>sipi</i>	第一次・ 単一	<i>Paracanthurus hepatus</i>	ナンヨウハギ		
			<i>tape tambako</i>	第二次	<i>Zebрасoma veliferum</i>	ヒレナガハギ		
	<i>sunu</i>		<i>sunu bulang sinurang</i>	第二次	<i>Plectropomus laevis</i>	スジアラ属の一種		
			<i>sunu mireh</i>	第一次・ 単一	<i>Plectropomus</i> spp.	スジアラ属の複数種		
			<i>sunu mireh</i>	第二次	<i>Plectropomus leopardus</i>	スジアラ		
			<i>sunu cambah</i>	第二次	<i>Plectropomus</i> sp.	スジアラ属の一種		
	<i>mogoh</i>		<i>mogoh angke</i>	第二次	<i>Bolbometopon muricatum</i> , <i>Chlorurus strongylocephalus</i>	カンムリブダイ属の一種, ハゲブダイ属の一種		
			<i>mogoh borah</i>	第二次				
			<i>mogoh loong</i>	第二次	<i>Scarus niger</i>	アオブダイ属の一種		
			<i>mogoh batu</i>	第二次	<i>Calotomus carolinus</i>	ブダイ属の一種		

表2 続き

大分類	上位包括名	下位包括名	個別名	語彙素	学名	和名	観察	
							確認	同定
			<i>mogoh pote papa</i> <i>mogoh samboh</i>	第二次 第二次				
	<i>bese</i>		<i>bese labbu</i> <i>bese panka</i> <i>bese mireh</i> <i>bese</i>	第二次 第二次 第二次 第二次	<i>Priacanthus hamrur</i>	テンジクダイ科の複数種 テンジクダイ科の複数種 ホウセキキントキ テンジクダイ科, ゴンベ科, キントキダイ科の複数種		
			<i>bese tanggiri</i> <i>bese tayung</i>	第二次 第二次	<i>Sphaeramia nematoptera</i>	テンジクダイ科の複数種 マンジュウイシモチ		
	<i>dodoh</i>		<i>dodoh sariau</i> <i>dodoh pote enko</i> <i>dodoh tambako</i>	第二次 第二次 第二次	<i>Acanthurus</i> spp. <i>Acanthurus</i> spp.	クロハギ属の複数種 クロハギ属の複数種		
	<i>lumis</i>		<i>lumis</i> <i>gurisan</i> <i>konke</i>	第一次・ 単一 第一次・ 単一 第一次・ 単一	<i>Canthigaster</i> spp.	キタマクラ属の複数種 フグ科, ハリセンボン科の複数種 ハリセンボン科の複数種		
	<i>pello</i>		<i>pello</i> <i>pello bunsu</i> <i>lampe</i>	第二次 第二次 第一次・ 単一	<i>Coris bulbifrons</i> <i>Labropsis manabei</i>	ベラ科, メギス科の複数種 ベラ科の一種 マナベベラ		
	<i>kumei</i>		<i>kumei batu</i> <i>kumei lamkopa</i> <i>kumei anjongang</i> <i>kumei kuneh bittah</i> <i>kumei chonkah</i> <i>kumei bilawwis</i> <i>sillah</i> <i>kumei pote</i>	第二次 第二次 第二次 第二次 第二次 第二次 第二次	<i>Naso vlamingii</i> <i>Naso</i> spp. <i>Naso</i> spp. <i>Naso lopezi</i> <i>Naso</i> spp.	テングハギ属の一種 テングハギ属の複数種 テングハギ属の複数種 ナガテングハギモドキ テングハギ属の複数種		
	<i>tanggiri</i>		<i>tanggiri</i> <i>tanggiri batak</i>	第二次 第二次	<i>Scomberomorus</i> spp.	サワラ属の複数種		
	<i>turingah</i>		<i>turingah</i> <i>turinga tanga</i> <i>turinga madiki</i> <i>mambulo</i> <i>teringa tanga</i> <i>deho</i>	第二次 第二次 第二次 第一次・ 単一 第一次・ 単一	 <i>Gymnosarda unicolor</i>	(スマ, ヒラソウダ) イソマグロ	○ △ ○ ○	
	<i>babakal</i>		<i>karoo</i> <i>lambe subbo</i> <i>lambe</i> <i>babakal</i>	第一次・ 単一 第二次 第二次 第二次	 <i>Sargocentron diadema</i> <i>Myripristis amaena</i> <i>Myripristis adusta</i>	イトウダイ科の複数種 ニジエビス アメマツカサ ツマグロマツカサ		
	<i>bilawwis</i>		<i>bilawwis sillah</i> <i>bilawwis samo</i> <i>bilawwis karangan</i>	第二次 第二次 第二次	<i>Siganus argenteus</i> <i>Siganus</i> spp. <i>Siganus spinus</i>	ハナアイゴ アイゴ属の複数種 アマアイゴ		
	<i>laundung</i>		<i>laundung burinti</i> <i>luppe</i> <i>laundung pangoteq</i>	第二次 第一次・ 単一 第二次	<i>Plectorhinchus</i> spp. <i>Diagramma pictum</i> <i>Plectorhinchus</i> spp.	コシヨウダイ属の複数種 コロダイ属の一種 コシヨウダイ属の複数種		
	<i>pipili</i>		<i>pipili</i>	第二次	<i>Caranx sexfasciatus</i>	ギンガメアジ		

表2 続き

大分類	上位包括名	下位包括名	個別名	語彙素	学名	和名	観察	
							確認	同定
			<i>pili kuneh</i>	第二次				
	<i>kambulle</i>	<i>kambulle kapur</i>	第二次	<i>Caesio caeruleaurea</i>	ササムロ			
		<i>kambulle curaan</i>	第二次	<i>Pterocaesio</i> spp.	タカサゴ属の複数種			
		<i>kambulle kuneh</i>	第二次	<i>Caesio cuning</i>	タカサゴ属の一種			
		<i>kambulle kondoh</i>	第二次	<i>Caesio lunaris</i>	ハナタカサゴ			
		<i>manchon buloh</i>	第二次		タカサゴ科, フェダイ科の複数種			
		<i>kambulle makkondo</i>	第二次	<i>Pterocaesio pisang</i>	タカサゴ属の一種			
		<i>kambulle toraja</i>	第二次	<i>Pterocaesio</i> spp.	タカサゴ属の複数種			
		<i>kambulle rembeng</i>	第二次		タカサゴ科の複数種			
	<i>ddo</i>	<i>ddo</i>	第二次		キンチャクダイ科の複数種			
		<i>ddo benbe</i>	第二次	<i>Pomacanthus sexstriatus</i>	ロクセンヤッコ			
		<i>ddo bulan</i>	第二次	<i>Pomacanthus annularis</i>	ワスケヤッコ			
	<i>kelalas</i>	<i>kelalas</i>	第二次	<i>Abudedefduf</i> spp.	オヤビッチャ属の複数種			
		<i>kelalas mondo</i>	第二次	<i>Abudedefduf septemfasciatus</i>	シチセンスズメダイ			
		<i>dayah macan</i>	第一次・複合					
		<i>kelalas batu</i>	第二次	<i>Abudedefduf sexfasciatus</i>	オヤビッチャ属の複数種			
		<i>kelalas kuneh</i>	第二次					
		<i>kelalas mondoh</i>	第二次					
		<i>kelalas nyulloh</i>	第二次					
	<i>tari gongoh</i>	<i>tari gongoh</i>	第二次	<i>Aulostomus chinensis</i> , <i>Fistularia commersonii</i>	ヘラヤガラ属, ヤガラ属の一種			
		<i>tari gongoh tokeq</i>	第二次	<i>Aulostomus maculatus</i>	ヘラヤガラ科の一種			
	<i>tannondoq</i>	<i>tannondoq jalan</i>	第二次	<i>Hippocampus histrix</i>	イバラタツ			
		<i>tannondoq</i>	第二次	<i>hippocampus</i> spp.	タツノオトシゴ属の複数種			
	<i>bubui</i>	<i>bubui</i>	第二次					○
		<i>bubui gusoh</i>	第二次	<i>Decapterus macarellus</i>	クサヤモロ			
	<i>kalampeđa</i>	<i>kalampeđa</i>	第二次		カレイ目の複数種			
		<i>kalampeđa kurah</i>	第二次					
		<i>kalampeđa gusoh</i>	第二次	<i>Bothus ocellatus</i>	ダルマガレイ科の一種			
	<i>sambela</i>	<i>sambela</i>	第一次・単一	<i>Siluridae</i>	ナマズ科			
	<i>tueh</i>	<i>tueh</i>	第一次・単一	<i>Exocoetidae</i>	トビウオ科			
		<i>poƨontu</i>	第一次・単一					
		<i>manggilala</i>	第一次・単一					
		<i>bisiparai</i>	第一次・単一					
		<i>ramƨa</i>	第一次・単一					
		<i>timbangang</i>	第一次・単一	<i>Muliidae</i> spp.	ヒメジ科の複数種			
		<i>kiamƨou malelah</i>	第一次・単一					
		<i>timbaloah</i>	第一次・単一	<i>Tylosurus crocodilus</i> , <i>Strongylura incisa</i>	オキザヨリ, リュウキユウダツ			

表2 続き

大分類	上位包括名	下位包括名	個別名	語彙素	学名	和名	観察	
							確認	同定
			<i>guntur</i>	第一次・ 単一	<i>Aprion virescens</i>	アオチビキ	○	
			<i>paplo samo</i>	第二次	<i>Sphyaena flavicauda</i>	タイワンカマス		
			<i>papalo</i>	第二次	<i>Sphyaena</i> spp.	カマス属の複数種		
			<i>dayah kelalas</i>	第一次・ 複合				
			<i>doh</i>					
			<i>baleke</i>	第一次・ 単一	<i>Plectorhinchus lineatus</i>	シマコシウダイ		
			<i>bonte sillah</i>	第二次		ボラ科の複数種		
			<i>bonte</i>	第二次			○	
			<i>endru-endru</i>	第一次・ 単一	<i>Variola</i> spp.	バラハタ属の複数種	○	○
			<i>bobol</i>	第一次・ 単一				
			<i>bangbangang</i>	第一次・ 単一	<i>Lutjanus</i> spp.	フエダイ属の複数種		
			<i>dayah rumah</i>	第一次・ 複合				
			<i>soa lana</i>	第一次・ 複合	<i>Gymnothorax fuscomaculatus</i>	ウツボ属の一種		
			<i>ruma</i>	第一次・ 単一				
			<i>temudaq</i>	第一次・ 単一				
			<i>ahaang</i>	第一次・ 単一	<i>Lutjanus bohar</i>	バラフエダイ		
			<i>insanpera</i>	第一次・ 単一				
			<i>manila</i>	第一次・ 単一	<i>Plectorhinchus orientalis</i>	コシウダイ属の一種		
			<i>dayah sangai</i>	第一次・ 複合	<i>Plectorhinchus</i> spp. <i>Lutjanus</i> spp.	コシウダイ属、フエダイ属の複数種		
			<i>tirisan</i>	第一次・ 単一	<i>Plectorhinchus polytaenia</i>	コシウダイ属の一種		
			<i>tambakang</i>	第一次・ 単一	<i>Trachinotus bailloni</i>	コバンアジ		
			<i>tongaq</i>	第一次・ 単一	<i>Carangoides dinema</i>	イトヒラアジ		
			<i>dayah mano</i>	第一次・ 単一	<i>Scomberoides</i> spp.	イケカツオ属の複数種		
			<i>tintah</i>	第一次・ 単一	<i>Selaroides leptolepis</i>	ホソヒラアジ		
			<i>lamura</i>	第一次・ 単一	<i>Carangoides</i> spp.	ヨロイアジ属の複数種		
			<i>pipiri kuneh</i>	第一次・ 複合	<i>Carangoides bajad</i>	コガネアジ		
			<i>baddoh</i>	第一次・ 単一	<i>Alectis indicus</i> , <i>Alectis ciliaris</i>	ウマヅラアジ、イトヒキアジ		
			<i>sulaiasah</i>	第一次・ 単一	<i>Macolor niger</i>	マダラタルミ		
			<i>sageh babah</i>	第二次	<i>Lutjanus</i> spp.	フエダイ属の複数種		
			<i>sageh</i>	第二次				
			<i>dapa</i>	第一次・ 単一	<i>Lutjanus gibbus</i>	ヒメフエダイ		
			<i>bangeke</i>	第一次・ 単一	<i>Lutjanus argentimaculatus</i>	ゴマフエダイ		
			<i>banguntuq kuneh</i>	第二次	<i>Mulloidichthys martinicus</i>			

表2 続き

大分類	上位包括名	下位包括名	個別名	語彙素	学名	和名	観察	
							確認	同定
			<i>banguntug</i>	第二次	<i>Mulloidichthys flavolineatus</i> , <i>Mulloidichthys vanicolensis</i>	モンツキアカヒメジ, アカヒメジ		
			<i>bulu ari</i>	第一次・単一	<i>Upeneus</i> spp.	ヒメジ属の複数種		
			<i>selo</i>	第一次・単一	<i>Parapriacanthus ransonneti</i> , <i>Pempheris</i> spp.	キンメモドキ, ハタンボ属の複数種		
			<i>ilak</i>	第一次・単一	<i>Kyphosus</i> spp.	イスズミ属の複数種		
			<i>buma</i>	第一次・単一	<i>Platax</i> spp., <i>Monodactylus argenteus</i>	ツバメウオ属の複数種, ヒメツバメウオ		○
			<i>ketah</i>	第一次・単一	<i>Drepane punctata</i> , <i>Scatophagus argus</i>	ユウダチスダレグイ, クロホシマンジュウグイ		
			<i>sumpitan</i>	第一次・単一				
			<i>tiboq</i>	第一次・単一	<i>Centropyge</i> spp., <i>Chromis</i> spp.	アブラヤッコ属, スズメダイ属の複数種		
			<i>dayah kinsan</i>	第一次・複合	<i>Amphiprion</i> spp.	クマノミ属の複数種		
			<i>sammal</i>	第一次・複合	<i>Bodianus</i> spp.	タキベラ属の複数種		
			<i>bukalan sillah</i>	第二次	<i>Choerodon</i> spp.	イラ属の複数種		
			<i>bukalan samo</i>	第二次	<i>Choerodon anchorago</i>	クサビベラ		
			<i>lampa</i>	第二次	<i>Choerodon fasciatus</i>	ベラ科		
			<i>lampa bora</i>	第二次	<i>Cheilinus</i> spp.	モチノウオ属の複数種		
			<i>pangaluang</i>	第一次・単一	<i>Sphyaena</i> spp.	カマス属の複数種		
			<i>lenko</i>	第一次・単一	<i>Sphyaena</i> spp.	カマス属の複数種		
			<i>pocci</i>	第一次・単一	<i>Parapercis</i> spp.	トラギス属の複数種		
			<i>dayah daraq</i>	第一次・複合		アゴアマダイ科, ミシマオコゼ科, ベラギンボ科, ヘビギンボ科の複数種		
			<i>mangilala</i>	第一次・単一	<i>Siganus</i> spp.	アイゴ属の複数種		
			<i>berra</i>	第一次・単一	<i>Siganus</i> spp.	アイゴ属の複数種		
			<i>rumah</i>	第一次・単一	<i>Rastrelliger kanagurta</i>	グルクマ		
			<i>chochoreng</i>	第一次・単一	<i>Lactoria</i> spp.	コンゴウフグ属の複数種		
			<i>taburroh</i>	第一次・単一		ハコフグ科の複数種		
			<i>toto</i>	第一次・単一		ハゼ科, ヘビギンボ科, ラブリソムス科の複数種		
			<i>tanjulu</i>	第一次・単一				
			<i>beseh</i>	第一次・単一				
			<i>tembah</i>	第一次・単一				
			<i>jalah gigi</i>	第一次・複合				
			<i>ngongoh</i>	第一次・単一				
			<i>kalimemmeq</i>	第一次・単一		カエルアンコウ属の複数種		

表2 続き

大分類	上位包括名	下位包括名	個別名	語彙素	学名	和名	観察	
							確認	同定
			<i>kalupoh</i>	第一次・ 単一				
			<i>tambalekeh</i>	第一次・ 単一				
			<i>babala</i>	第一次・ 単一				
			<i>pote mata</i>	第一次・ 複合	<i>Gerres acinaces</i>	ツツバリサギ		
			<i>bontai</i>	第一次・ 単一	<i>Rachycentron canadum</i>	スギ		
			<i>gummi</i>	第一次・ 単一	<i>Echenesis naucrates</i>	コバンザメ属の一種		
			<i>dayah buloh</i>	第一次・ 複合	<i>Alectis ciliaris</i>	イトヒキアジの稚魚		
			<i>tampa kanbonda</i>	第一次・ 複合				
			<i>tampakan</i>	第一次・ 単一				
			<i>gagade</i>	第一次・ 単一	<i>Selar crumenophthalmus</i>	メアジ		
			<i>urouro</i>	第一次・ 単一	<i>Elagatis bipinnulata</i>	ツムブリ	○	○
			<i>lamadah</i>	第一次・ 単一	<i>Coryphaena hippurus</i>	シイラ	○	○
			<i>dayah meyah</i>	第一次・ 複合	<i>Caranx lugubris</i>	カッボレ		
			<i>marapas</i>	第一次・ 単一	<i>Lutjanus campechanus</i>	フエダイ属の一種		
			<i>sumpeh lea</i>	第一次・ 複合	<i>Lutjanus synagris</i>	フエダイ属の一種		
			<i>dayah tanah</i>	第一次・ 複合	<i>Lutjanus spp.</i>	フエダイ属の複数種		
			<i>kurindan</i>	第一次・ 単一				
			<i>pandangnang</i>	第一次・ 単一				
			<i>ulapai</i>	第一次・ 単一				
			<i>kouaq ddiu</i>	第二次 第一次・ 単一	<i>Blenniidae spp., Chaenopsidae spp., Calli nymidae spp., Microdesmidae spp., Gobiidae spp.</i>	イソギンポ科, コケギン ポ科, ネズツポ科, オオ メフラスボ科, ハゼ科の 複数種		
			<i>chonkah sembelah</i>	第二次 第一次・ 単一	<i>Plotosidae spp., Ophidiidae spp.</i>	ゴンズイ科, アシロ科の 複数種		
			<i>papangau</i>	第一次・ 単一	<i>Papilloculiceps longiceps</i>			
			<i>laroh</i>	第一次・ 単一	<i>Scorpaenidae spp.</i>	フサカサゴ科の複数種		
			<i>simbula</i>	第一次・ 単一	<i>Anthiinae spp.</i>	ハナダイ科の複数種		
			<i>dayah subbo</i>	第一次・ 複合	<i>Anthiinae spp.</i>	ハナダイ科の複数種		
			<i>balloa</i>	第一次・ 単一	<i>Plesiops spp.</i>	タナバタウオ属の複数種		
			<i>semiun</i>	第一次・ 単一	<i>Diploprion bifasciatum</i>	キハツソク		
			<i>garensen</i>	第一次・ 単一			○	

表2 続き

大分類	上位包括名	下位包括名	個別名	語彙素	学名	和名	観察	
							確認	同定
			<i>tudoh basoh</i>	第二次・ 複合		(ヨロイアジ属)	○	△
			<i>kokkoreh</i>	第一次・ 単一	<i>Terapon jarbua</i>	コトヒキ		
			<i>bebete</i>	第一次・ 単一	<i>Leiognathus equula</i>	セイタカヒイラギ		
			<i>salome</i>	第一次・ 単一				
			<i>dayah</i>	第一次・ 複合				
			<i>maruebandah</i>	第一次・ 単一				
			<i>darua</i>	第一次・ 単一				
			<i>layaran</i>	第一次・ 単一	<i>Istiophorus platypterus</i>	バシヨウカジキ		

出所：現地調査をもとに筆者作成。学名と和名は奥谷 [2000], 益田ほか [1984], 多岐ほか [2000] を参照し、同定には岩田明久氏（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科名誉教授）のご協力を得た。

注：○…確認/同定できたもの、△…図鑑を用いた回答は得られなかったが、確認と同定ができたもの、()…△の場合に同定された名前

(1) 語彙の構成要素

魚類の語彙をみると、複数の語からなる名称が多いことがうかがえる。たとえばンドー・シッラー *ndoh sillah* は、ンドーはウツボ科、シッラーは外洋域にあたる海域 [中野真備 2020] を意味し、ここに生息するウツボ科の複数種を指す。キアプ・ミレー *kiapu mireh* は、「赤い・キアプ (ユカタハタ属)」を意味し、ユカタハタ属の複数種を指す。カレオ・メオ *kareo meo* は「ネコ・サメ」を意味し、ネコのヒゲのような形質のあるオオセ属の複数種のことである。このように、魚類の特徴を表現する語彙には、①生息場所に由来するもの、②色彩に由来するもの、③形質に由来するものがある (表3)。

①生息場所について言及されることのある語彙を以下にまとめる。バトゥ *batu* (岩)、シッラー *sillah* (外洋)、ラナ *lana* (堤のように盛り上がった海底)、グソー *gusoh* (砂)、ダラック *daraq* (陸)、サモ *samo* (海藻)、タナー *tanah* (土地)、スッボ *subbo* (サンゴ礁域)

表3 サマ語の魚類方名における表現語彙素

語彙素の表現	サマ語の語彙素
生息場所	バトゥ <i>batu</i> (岩)、シッラー <i>sillah</i> (外洋)、ラナ <i>lana</i> (堤のように盛り上がった海底)、グソー <i>gusoh</i> (砂)、ダラック <i>daraq</i> (陸)、サモ <i>samo</i> (海藻)、タナー <i>tanah</i> (土地)、スッボ <i>subbo</i> (サンゴ礁域)
色彩	ミレー <i>mireh</i> (赤)、ニュッロー <i>nyulloh</i> (青)、ロオン <i>loong</i> (黒)、ポテ <i>pote</i> (白)、クネー <i>kuneh</i> (黄)、アブ <i>abu</i> (灰)
形質	ブラン <i>bulan</i> (月)、メオ <i>meo</i> (ネコ)

出所：現地調査より筆者作成。

daraq (陸), サモ *samo* (海藻), タナー *tanah* (土地), スッボ *subbo* (サンゴ礁域) の8種である。特筆すべきは、ここにサマ語に特有の概念が含まれることである。シッター (外洋), ラナ (堤のように盛り上がった海底), ダラック (陸), タナー (土地) については注意が必要である。これらの空間分類用語は、バンガイ諸島サマ人に独自のものであり、必ずしも日本語やインドネシア語の語彙と一対一対応できるものではないが、詳細は中野 [同上論文] にて公表されている通りである。K村のサマ人漁師による海の空間認識については、すでに一考察を試みている [同上論文]。

②色彩について言及されることのある語彙は、ミレー *mireh* (赤), ニュッロー *nyulloh* (青), ロオン *loong* (黒), ポテ *pote* (白), クネー *kuneh* (黄), アブ *abu* (灰) の6種である。

③形質について言及されることのある語彙は、ブラン *bulan* (月) とメオ *meo* (ネコ) である。

(2) 語彙の構造

続いて、それぞれの語彙の要素がどのように構成されているのかを分析する。

表2にあるとおり、採集された語彙は、まず魚類全体を指すダヤー *dayah* (魚) と、パイ *pai* (エイ), カレオ *kareo* (サメ), クイッタ *quitta* (タコ) やスントゥン *suntun* (イカ) などに大きく分けられる。魚類ダヤーに含まれる個々の方名は245例、パイ (エイ) は12例、カレオ (サメ) は22例であった。クイッタ (タコ) については、筆者がこれ以上に細かい方名を採集することはなかった。

本稿では、魚類の民俗語彙について、それ以上分類されない方名、つまり聞き取りにおいてそれぞれの種に対してつけられた方名を個別名と呼ぶ。そして、いくつかの方名を包括する語彙を下位包括名、さらに複数の下位包括名を包括する語彙を上位包括名、複数の上位包括名を包括する語彙を大分類と呼ぶことにする。したがって、カレオ (サメ) は上位包括名に、ダヤー (魚) は大分類にそれぞれ相当する。全ての方名に、それぞれの包括名にあたる語彙があるわけではない。たとえばクイッタは個別名であるが、クイッタに分類される他の個別名も確認されなかったことから、独自の包括名は存在せず、個別名がそのまま包括名や大分類となっている。

本研究のための調査では、全ての包括名や分類基準について記録することはせず、個別名を収集することを目的とした。本稿では、収集した個別名について、その語彙がどのように構成されているか、どのような情報と結びつけて命名されているかということに焦点をあてて分析する。

民俗分類の語彙素分析について著名な研究として、バーリンら [Berlin *et al.* 1968] によるマヤ系言語の語彙素分析が挙げられる [松井 1991]。バーリンら [Berlin *et al.* 1973] によれば、語彙素 (lexeme) は第一次語彙素 (primary lexeme) と第二次語彙素 (secondary lexeme) に

分けられる。第一次語彙素とは、単一 (unitary) でそれ以上には分解することのできない (unanalyzable) 語彙素と、分解可能 (analyzable) で複合的 (composite) な語彙素に分けられる。単一で分解不可能な語彙素とは、サマ語におけるダヤー (魚) やカレオ (サメ) のように、これ以上分解することができず、単独で意味をもっている語彙素を指す。一方、分解可能で複合的な語彙素とは、ハナダイ科の複数種を指すダヤー・スッポ *dayah subbo* (サンゴ礁・魚) のように、2つ以上に分解することができる語彙素を指す (図2)。

分解可能な語彙素は、さらに2つに分けられる。1つ目は、複合的な語彙素から構成される個別名に、個別名よりもはるかに包括的な語彙素が含まれているものであり、バーリンの語彙素分析では、これを生産的 (productive) なものと表現している。サマ語では、ダヤー・スッポ (ハナダイ科の複数種) がこれにあたり、「スッポ (サンゴ礁域)」に生息する「ダヤー (魚)」を意味する。ここにおいてダヤー (魚) は大分類であり、個別名よりもはるかに包括的な語彙素である。

複合的な語彙素が個別名を包括するような語彙素ではない場合、バーリンの語彙素分析では、これを非生産的 (unproductive) なものと表現している。これに分類されるサマ語の魚類名は極端に少ない。たとえばタラン・ティコロク *tarang tikoloq* (シュモクザメ科の一種、メジロザメ科の複数種) がこれにあたり、「鋭い・頭」を意味する。

一方、第二次語彙素は、複合的で分解可能であるが、個別名の構成要素のなかに、直接一段階上位の包括名が含まれている。サマ語では、「サメ・ネコ」を意味するカレオ・メオ *kareo meo* (オオセ属の複数種) や、「サンゴ礁域・キアプ (ハタの類)」を意味するキアプ・スッポ *kiapu subbo* (マハタ属の複数種) が挙げられる。

このように、K村のサマ語の魚名における語彙素の構成は、(1) 第一次語彙素 (分解不可能・単一的)、(2) 第一次語彙素 (分解可能・複合的・生産的)、(3) 第一次語彙素 (分解可能・複合的・非生産的)、(4) 第二次語彙素に分類することができる。

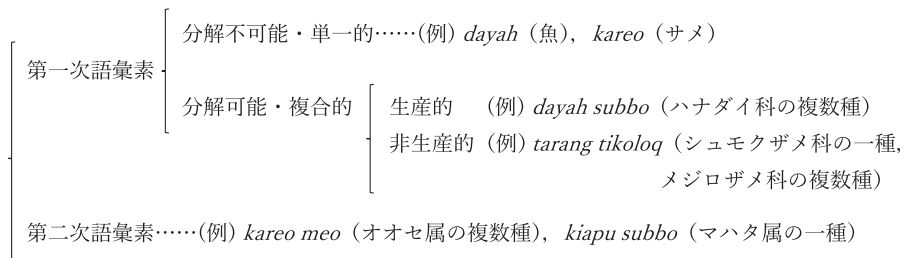


図2 サマ語の魚類名名の構造

出所: 松井 [1991] および Berlin *et al.* [1973] を参考に筆者作成。

サマ語の魚名における語彙素構造の割合を図3に示すと、分解可能で単一的な第一次語彙素と、第二次語彙素がそれぞれ約半数の割合を占める結果となった。図3の結果から、K村のサマ語の魚類名における語彙素構成の傾向として、単一的で分解不可能な個別名であるか、個別名より一段階上位の包括名を含む複合的な個別名であるか、大きく2つがあることが明らかになった。

3. 漁場の命名

K村の漁師が利用する漁場は、釣り漁を中心とする主な漁法のために少なくとも29カ所ある。これらは海底微地形の違いによって区別され、ラナ *lana*、パンギリ *pangiri*、ティンプス *timpusu*、パマンガ *pamangan* の4種類に分類される [中野真備 2020]。特に多く利用されていたのはラナで、これは堤のように盛り上がった海底とその外縁部を指す。海底の形状はラナに似るが、堤の面積がラナよりはるかに広いものがパンギリ、やはりラナに似ているがより深く狭いものがティンプスである。一方、パマンガは海底地形に共通した特徴をもたず単に「釣る場所」を意味するものである。ラナ型漁場は、全29カ所のうち18カ所を占め、パンギリ型漁場は5カ所、ティンプス型漁場は3カ所、パマンガ型漁場は3カ所であった。漁場の空間分類と環境認識については、中野真備 [同上論文] を参照されたい。

K村の漁師が利用する漁場、漁場名とその意味、4タイプの空間分類について表4に示した。

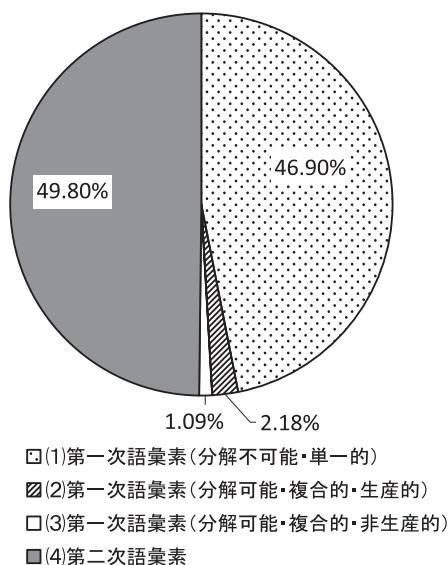


図3 サマ語の魚名における語彙素構造の割合
出所：現地調査をもとに筆者作成。

漁場については、包括名がなく、語彙素に段階の上下がないため、バーリン・システムによる分類の分析には適さないことが明らかであった。そこで、漁場名の命名規則が分析された。

29カ所の漁場について、命名の由来を、地形と場所（例：特定の島名、岬名、「遠いところ」）、生態（例：ウミガメ、サメ）、発見者（表中ではおじさんと表記される、特定の人物名）、故事（昔話において布がかけられた、など）、由来不明に分類した結果、4種類の漁場すべてにおいて、地形と場所に由来する命名が最も多く、ついで生態に由来するもの、および発見者に由来するものが挙げられた（表4、図4）。

表4 K村の漁師が利用する漁場の名前

漁場名	意味	空間分類	備考
<i>Pajaleko</i>	曲がっているところ	PM	
<i>Lana kareo</i>	サメのラナ	L	サメが多く、サメ延縄漁に適している
<i>Pangsak</i>	サメの幼体	PM	サメが多い
<i>Mbo Nipong</i>	ニポンおじさん	PM	ニポンおじさんが発見
<i>Pangiri batu panga</i>	<i>Panga</i> の石のパンギリ	PG	
<i>Timpusu Mbo Lambus</i>	ランブスおじさんのティンプス	T	ランブスおじさんが発見
<i>Pangiri togong putil</i>	トゴン・プティル島のパンギリ	PG	
<i>Boa mabuka</i>	広いところの口	L	特定の島と島に挟まれた空間のうち、比較的広い海域のひとつ
<i>Lana Togong putil</i>	トゴン・プティル島のラナ	L	
<i>Lana bida</i>	布のラナ	L	昔水浴びする人がいて、布をかけていた岩礁が近くにあった
<i>Lana mattinga</i>	真ん中のラナ	L	？と？の間に位置する
<i>Lana haji</i>	ハッジのラナ	L	あるハッジが発見
<i>Lana kulitan</i>	ウミガメのラナ	L	ウミガメが多い
<i>Lana Mbo Damarin</i>	ダマリンおじさんのラナ	L	ダマリンおじさんが発見
<i>Lana mateo</i>	遠いところのラナ	L	最も遠方に位置するラナ
<i>Timpusu Toroh majureh</i>	<i>majureh</i> の岬のティンプス	T	
<i>Pangiri Toroh buroh</i>	アナツバメ岬のパンギリ	PG	
<i>Lana mandarak</i>	陸のラナ	L	「陸的」空間 [中野真備 2020] のラナ
<i>Lana Setenten</i>	ステンテン（人名）のラナ	L	ステンテン（人名）が発見
<i>Lana Matanga</i>	マタンガ村のラナ	L	マタンガ村を目印にする
<i>Lana Setembai</i>	ステンバイ（人名）のラナ	L	ステンバイ（人名）が発見
<i>Lana Mbo Abang</i>	アバンおじさんのラナ	L	アバンおじさんが発見
<i>Pangiri Toroh Karoe</i>	カロエ（鳥名）岬のパンギリ	PG	
<i>Pangiri Bakakan</i>	<i>Bakakan</i> のパンギリ	PG	
<i>Timpusu Asasal</i>	アササル島のティンプス	T	
<i>Lana Saban</i>	サバン村のラナ	L	
<i>Lana Bakalang</i>	バカラン島のラナ	L	
<i>Lana Tabakang</i>	<i>Tabakang</i> のラナ	L	
<i>Lana Ponding-ponding</i>	ボンディンボンディン村のラナ	L	

PM = パマンガン型漁場, PG = パンギリ型漁場, L = ラナ型漁場, T = ティンプス型漁場
 出所：現地調査より筆者作成。

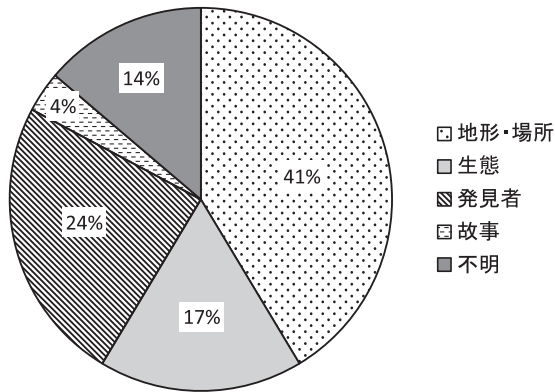


図4 漁場の命名に利用される指標の内訳
出所：現地調査より筆者作成。

地形と場所に由来する漁場名の例に、ボア・マブカ *Boa mabuka*（口・広いところ）や、ラナ・マタンガ *Lana Matanga*（ラナ・マタンガ村）がある。「ボア」は島と島の間の狭い空間を指す語彙であり、マタンガ村は陸上にある村の名前である。しかし、ボア・マブカは決して広いところではなく、ラナ・マタンガはマタンガ村からは遠く離れた場所にある。聞き取り調査によると、実はこれらの例は、そこに到達するために利用される目標物や、航行の安全上、あるいは迷わないために、かつてそこを通過していくことが望ましいとされた地点の名前がつけられているのである。つまり、実際には漁場は遠い沖合にあるにもかかわらず、その名称には陸や沿岸の延長線上として語彙が与えられているのである。これは、K村における漁場の命名の特徴の1つであると指摘できる。

また、由来不明の漁場名のなかに、ラナ・トゴン・プティル *Lana Togong putil* の例がある。「トゴン・プティル」はサマ語ではなく、バンガイ語であり、バンガイ人による島の呼び名であるという。バンガイ人とは、中スラウェシ州バンガイ県、バンガイ諸島県、バンガイラウト県を中心とする地域において、人口的に主要な民族集団であり、バンガイ語を母語とする人びとである。それから、ティンプス・トロロー・マジュレー *Timpusu Toroh majureh* は「マジュレーの岬のティンプス」を指すが、漁師たちのなかに「マジュレー」の意味を知っている者はおらず、（意味は分からないが）「古いサマ語だ」とする回答が1名からあったのみであった。このように、由来不明の漁場名もあったが、事例数でいえば、K村のサマ人がその意味を即答できるような「サマ語」が多いことが、漁場の命名の特徴の2つ目である。

4. 目標物の命名

K村のサマ人漁師らは、海上で自船の位置や目的地である漁場の位置を把握するために、陸

海上の目標物を利用して海上を運行する。これは日本でいうところのヤマアテ（ヤマタテ）[五十嵐 1977]にあたる位置特定技術の一種である。ヤマアテでは一般に、陸上や海上の特徴的な形をもつ自然物や人工物を視認し、それらの位置関係によって、漁場や自船の位置を知ることができる。

K村のサマ人漁師が利用することのある目標物としては、山、離れ岩（リーフブロック）、岬、湾、天体が確認された。

山の固有名称は、レッゲ・テッル *Regge tellu*（三本の棘）とブッル・ガラ *Bullu gala*（竹の山）の2カ所のみである。いずれも、バンガイ諸島域にある山である。

ここでは、K村の漁師が利用する目標物のうち、特に多く事例が確認された離れ岩、岬、湾、天体について分析する。まずそれぞれの語彙の一覧を提示し、続いて命名基準の内訳をもとに語彙構成を分析する。

(1) 離れ岩の名称

まず離れ岩は、サマ語でトゥコー *tukoh* と呼ばれるものであり、島からさほど遠くない海上に頭を出している岩や海食柱を指す。これらの位置関係は比較的正確に把握される。K村のサマ人漁師らが利用する漁場のほとんどは、これらの離れ岩を経由していく航行ルートが望ましい⁷⁾とされているため、位置特定技術において最も利用頻度が高い目標物といえる。聞き取り調査より確認された15カ所の離れ岩の名前について、表5に示す。

K村のサマ人漁師らによれば、離れ岩の名称も、大部分がサマ語の語彙によって命名されているものだという。たとえばトゥコー・シンボレー *Tukoh simboleh* は、女性が後頭部で髪を結びあげた状態 (*simboleh*) の横顔のシルエットに似ていることに由来する。トゥコー・マンディラオ *Tukoh mandilao* (海にある・トゥコー) は、K村のサマ人にとっての「海的」空間 [中野真備 2020] に位置することからそう呼ばれてきた。しかしあるとき、波で岩が「折れて (*appo*)」しまった。そのため、トゥコー・マンディラオ (海にある・トゥコー) は新たにトゥコー・マアッポ *Tukoh maappo* (折れた・トゥコー) と呼ばれるようになったのだという。このように、K村のサマ人は、それぞれの離れ岩の微細な特徴をよく観察し、記憶していることがうかがえる。また、発見者の名前を冠したものが6例と比較的多くみられることも、離れ岩の名称の特徴である。発見者の名前にサマ語の語彙であるンボ *Mbo* (年長者を指す語彙)⁸⁾ が付されていたことから、これらの発見者はサマ人漁師であると考えられる。

7) 特定の離れ岩群を経由したり、特定の目標物の前を通ったりする航行ルートが望ましいとされている理由は、より安全であるから、あるいは迷わないからであると考えられる。しかし実際にGPSで漁撈ルートを追跡してみると、必ずしもこのルートを通過するとは限らないことも分かっている。

8) ンボ・リッラ *mbo lilla* (ンボ・男) は祖父、ンボ・ディンダ *mbo dinda* (ンボ・女) は祖母を指す。また、ンボンボ・ダウル *mbombo dauu* (ンボたち・以前) は祖先を指す。

表5 離れ岩トゥコーの名前

離れ岩トゥコーの名前	意味	備考
<i>Tukoh Semibut</i>	センビウツ村のトゥコー	地形・場所
<i>Tukoh mandilao (Tukoh maappo)</i>	海のトゥコー (壊れたトゥコー)	地形・場所
<i>Tukoh kappal</i>	船のトゥコー	地形・場所
<i>Tukoh simboleh</i>	<i>simboleh</i> (女性の髪型) のトゥコー	地形・場所
<i>Tukoh mabasar</i>	大きなトゥコー	地形・場所
<i>Tukoh kasurang</i>	敷き布のトゥコー	故事
<i>Tukoh garoh (Tukoh berduri)</i>	棘のあるトゥコー	地形・場所
<i>Tukoh mandarak</i>	陸のトゥコー	地形・場所
<i>Tukoh Buniton</i>	ブニトン村のトゥコー	地形・場所
<i>Tukoh karoe</i>	カロエ (鳥名) のトゥコー	生態
<i>Tukoh banderak</i>	<i>banderak</i> のトゥコー	不明
<i>Tukoh bunginang</i>	<i>bunginang</i> のトゥコー	地形・場所
<i>Tukoh mbatong-batong</i>	<i>mbatong-batong</i> 岬のトゥコー	地形・場所
<i>Tukoh mapara</i>	たくさんのトゥコー	地形・場所
<i>Tukoh sambang</i>	<i>sambang</i> のトゥコー	不明

出所：現地調査より筆者作成。

(2) 岬の名称

ペレン島やバンガイ島のいくつかのトロー *toroh* (岬) も、位置特定技術の目標物の一種として漁撈活動に利用される。聞き取り調査より確認された20カ所の岬の名前について、表6に示す。

岬の名称についてK村のサマ人漁師ら(漁師A, 漁師F, 漁師O)に聞くと、漁場や離れ岩とは異なり、「分からない」、「バンガイ語だろう」、「古いサマ語だろう」といったような曖昧な回答が増え、20カ所中15カ所の意味が「不明」とされた。しかし対照的に、その位置関係については詳細な回答が得られた。ある漁師は、バンガイ島の最北部にある岬からはじまり、筆者が地図上で見るかぎり特徴的なほほ全ての岬や湾、村を、時計回りにほぼ全て順番通りに暗唱することができた。このように、K村のサマ人漁師は、岬の名称については曖昧な部分が多いが、その位置関係については連続する目標物のひとつとして詳細に把握していたのである。

(3) 湾の名称

続いて、およそ湾にあたるサマ語の語彙として、ロホック *lohoq* とルッコック *lukkoq* があげられる。海岸で、内陸側にくぼんだような形になっている、小さな湾のことをロホックと呼び、それよりも規模の小さいものをルッコックと呼ぶ。ここではロホックとルッコックの双方を湾として扱う。聞き取り調査より確認された14カ所の湾の名前について、表7に示す。

表6 岬の名前

岬の名前	意味	備考
<i>Toroh majureh</i>	禁忌の岬	故事
<i>Toroh mbatong-batong</i>	<i>mbatong-batong</i> の岬	不明
<i>Toroh sikepek</i>	<i>sikepek</i> の岬	不明
<i>Toroh kadiata</i>	<i>kadiata</i> の岬	不明
<i>Toroh pandan badul</i>	<i>badul</i> のタコノキの岬	不明
<i>Toroh mangsigik</i>	<i>mangsigik</i> の岬	不明
<i>Toroh Mbo Asuna</i>	アスナおじさんの岬	発見者
<i>Toroh bakidung</i>	<i>bakidung</i> の岬	不明
<i>Toroh kibit</i>	<i>kibit</i> の岬	不明
<i>Toroh dirangar</i>	<i>dirangar</i> の岬	不明
<i>Toroh ponpon</i>	<i>ponpon</i> の岬	不明
<i>Toroh pulau Nenek</i>	<i>Nenek</i> 島の岬	地形・場所
<i>Toroh pisah</i>	バナナの岬	生態
<i>Toroh tapaang</i>	<i>tapaang</i> の岬	不明
<i>Toroh buttun</i>	<i>buttun</i> の岬	不明
<i>Toroh sinoli</i>	墓地の岬	地形・場所
<i>Toroh puajanmang</i>	<i>puajanmang</i> の岬	不明
<i>Toroh karoe</i>	カロエ（鳥名）の岬	不明
<i>Toroh bakal</i>	<i>bakal</i> の岬	不明
<i>Tukoh malummak</i>	<i>malummak</i> の岬	不明

出所：現地調査より筆者作成。

表7 湾の名前

湾の名前	意味	備考
<i>Lohoq Bulagi</i>	ブラギの湾	地形・場所
<i>Lohoq tanah</i>	タナー [中野真備 2020] の湾	地形・場所
<i>Lohoq Asasal</i>	アササル島の湾	地形・場所
<i>Lohoq Mato</i>	<i>Mato</i> の湾	地形・場所
<i>Lohoq ruma</i>	<i>ruma</i> の湾	不明
<i>Lohoq bakidung</i>	<i>bakidung</i> の湾	不明
<i>Lohoq ongko</i>	<i>ongko</i> の湾	不明
<i>Lohoq salatan</i>	南の湾	地形・場所
<i>Lohoq Buniton</i>	ブニトン村の湾	地形・場所
<i>Lohoq Tinakin</i>	ティナキン（地名）の湾	地形・場所
<i>Lohoq sibiru</i>	禁忌の湾	故事
<i>Lohoq pamali</i>	禁忌の湾	故事
<i>Lukkoq ingatang</i>	インガタン（魚名）の湾	生態
<i>Lukkoq Mandar</i>	マンダール人の湾	故事

出所：現地調査より筆者作成。

湾の名称は、そのほとんどが「アササル島の」や「ブニトン村の」といったように、地理的範囲の大きな場所によってつけられており、湾の詳細な情報に由来するものは、生態環境に由来するわずか一例しかない。しかし、位置関係については岬と同様に、連続する目標物のひとつとして詳細に捉えていた。湾の名称には、故事に分類されるものが3例あるが、離れ岩とは異なり、発見者に由来するものはなく、詳細な故事は伝承されていない。湾のひとつ、ルッコク・マンダール *Lukkoq Mandar* は、マンダール人⁹⁾ が住んでいたことのみが知られている。

14例の湾の方名では、地形や場所が由来となることが多く、特に村落や島の名前に基づいて命名されている。これらは行政村落の名称や、バンガイ語やインドネシア語による呼称であると推測されるものが多い。

(4) 天体の名称

夜間に運行する際、山や島の影が視認できない場合には、天体を見て方角を知ることができる。K村の漁師の認識する天体として確認された天体は、表8に示す14種類である。「星」はサマ語で、ママウ *mamau*、マウ *mau*、あるいはツマウ *mmau*¹⁰⁾ である。本稿では、K村のサ

表8 天体の名前

サマ語名	意味	名前の由来	一般名	学名 (IAU)
<i>Mmau timur</i>	東の星	方角		β Orionis
<i>Mmau barat</i>	西の星	方角		
<i>Mmau utara</i>	北の星	方角		
<i>Mmau selatan</i>	南の星	方角		
<i>Mmau layah</i> (1)	帆の星	形		γ Volans (とびうお座) ? 他
<i>Mmau layah</i> (2)	帆の星	形		
<i>Mmau pitu</i> (<i>Pupuru</i>)	7つの星 (集まり)	形	スバル (プレアデス 星団)	Pleiades
<i>Tanda tellu</i>	3つの目印	形	ミンタカ, アルニラム, アルニタク	δ, ϵ, ζ Orionis (オリオン座)
<i>Niyor</i> (現)	不明	不明	アルデバラン	α Tauri (おうし座)
<i>Niyor</i> (旧)	不明	不明	シリウス	Sirius Canis Major (おおいぬ座)
<i>Mmau llau</i>	昼の星	時間	金星	Venus
<i>Mmau Naga</i>	竜の星	形	天の川	Milky Way Galaxy
<i>Mmau tunggara</i>	南東の星	方角	カノープス	α Carinae (りゅうこつ座)
<i>Mmau baleba</i>	北西の星	方角		

出所：現地調査より筆者作成。

9) マンダール人とは、スラウェシ島西部を中心に居住する、漁業を主な生業とする民族集団である。木造船造りに長け、帆船を用いたレースをおこなうことでも知られている。

10) 「星」を表す、類似した3つの表現がある理由や使い分けは、今のところは分かっていない。たとえばある1人の漁師が、会話のなかでママウ、マウ、ツマウを混ぜて使用することもめずらしくない。

マ人漁師らの間で比較的使用頻度の高い、ツマウに統一して記述する。ここには恒星だけでなく、惑星や流星も含まれる。

K村のサマ人漁師らによれば、天体の名称のほとんどは、サマ語であるという。その命名基準は、大きく方角か形（配置）に分かれ、いくつかの天体については人物や物体のイメージが付与されている。たとえば、ツマウ・ナガ *Mmau Naga* は「星・竜」を意味し、天の川を指す。サマ人の口頭伝承において、ナガ（竜）に関する伝説は確認されなかったが、実際に天の川の方角や位置関係に言及する際、「ナガの頭のほう」といったように、ナガ（竜）の形態として認識しているようであった。

また、ツマウ・ツラウ *Mmau Ilah*（星・昼）は金星に相当するが、名称は「昼」に出現する星であることを意味している。金星は地球から見ると明け方と夕方にのみ観測ができるため、実際には昼に視認することはできない。しかし漁師らに1日の時間区分の名称を聞いてみると、日照直後の明け方や日没直前の夕方もツラウ（昼）に含まれることが分かった。このように、K村のサマ人は、サマ人の独自の認識や時間感覚に基づいて天体の名称を記憶しているのである。

(5) 目標物の方名の語彙構成

これまで離れ岩、岬、湾、天体の名称について整理し、それぞれにいくつかの特徴があることが明らかになった。この背景にはどのようなことが関係しているのか、K村のサマ人の語る「サマ語」と、実際にこれらの方名を利用する場面や景観に着目して分析する。

まず、15例の離れ岩の方名の由来を分類すると、地形や場所に由来する方名が最も多く確認されたほか、大部分がサマ語の語彙によって命名されていることが分かる（図5）。一方で、20

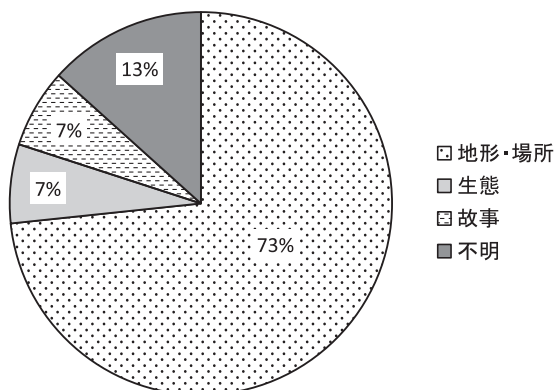


図5 離れ岩トウコーの命名に利用される指標の内訳
出所：現地調査より筆者作成。

例の岬の方名をみると、由来不明あるいは少なくとも現在のK村のサマ語の民俗語彙では理解されていないものが15例確認され、大部分を占めている（図6）。14例の湾の方名では、行政村落の名称や、バンガイ語やインドネシア語による呼称であると推測されるものが多い。また、続いて由来不明の割合も目立つ結果となった（図7）。14例の天体の方名は、大部分がサマ語の語彙に基づいている点で離れ岩に類似する（図8）。

K村のサマ人漁師によれば、これらの目標物は大きく2つに分けられる。それは、離れ岩や天体のようにサマ語による方名が顕著な目標物と、湾や岬のように由来不明（「古いサマ語」や「バンガイ語」とされるものも含む）の目標物である。この背景には、景観を視認する漁師らの位置と、景観から他集団の居住地への距離が影響している。

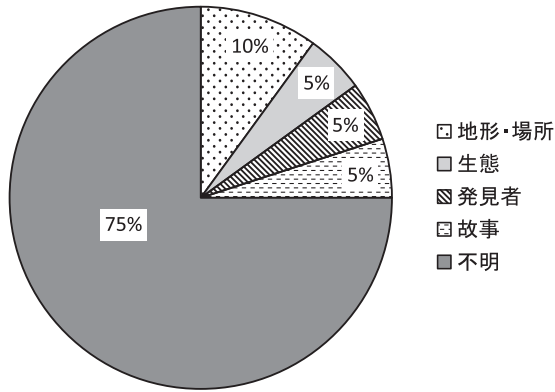


図6 岬の命名に利用される指標の内訳

出所：現地調査より筆者作成。

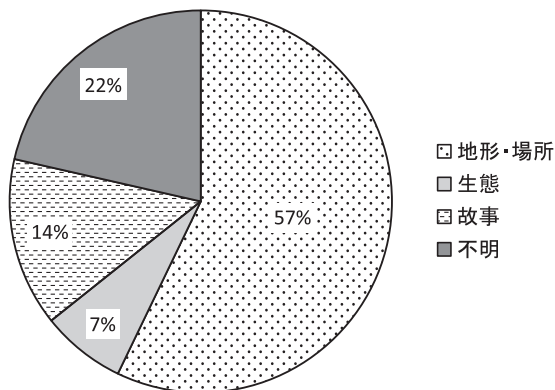


図7 湾の命名に利用する指標の内訳

出所：現地調査より筆者作成。

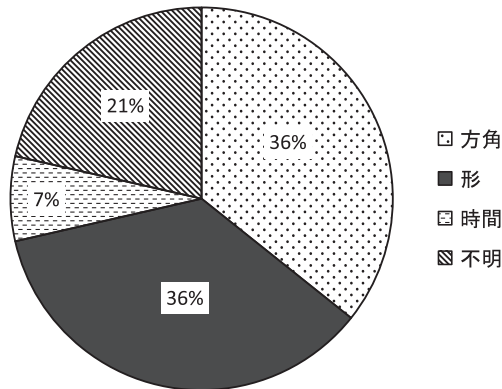


図8 天体の命名に利用される指標の内訳
出所：現地調査より筆者作成。

まず景観の特徴について、GPSで追跡したある日の出漁ルートを例に説明する。比較的近い東方の漁場に出漁したある日の往復移動距離は47.32 kmであり、ペレン島南東の海岸に位置するK村からの直線距離は約20 kmであった。このルートでは、午前2時から午前4時頃に出漁して、しばらくペレン島に沿って北上したあとに、連続する特定の離れ岩に沿って船を進める。しかし、離れ岩群を過ぎると、ペレン島やバンガイ島と約10 kmの距離がひらいた状態になる。こうなると、ペレン島やバンガイ島の岬や湾は、はるか遠くに見える目標物となり、その微細な形の違いや色を知ることは難しいのである。漁師たちは、これらの目標物のある地点に滞在したこともないため、由来不明の名称になる。

このような目標物の見え方の特徴をそれぞれまとめると、離れ岩は、視認する地点が比較的近い距離にあるため、その形態がよく観察される目標物であること、岬や湾は、視認する地点が比較的遠い距離にあるため、微細な違いは認められない目標物であることが指摘できる。

天体も目標物のひとつであるが、これまでの目標物とは、目安となる規模が大きく異なる。離れ岩や岬、湾がヤマアテのような位置特定方法で利用される目標物であるのに対して、天体はこうした方法では利用されない。たとえば、ツマウ・ティムール *Mmau timur* (星・東) は「東へ行くときに見る」、「タリアブ島(北マルク州)に行くときに見る」など、遠距離を移動するときの目標物である。海上移動において天体は、いわばコンパスのような役割なのであり、離れ岩や岬、湾とは異なる機能をもっている。こうした機能の特質を考慮すれば、天体は比較的長距離の海上移動のさい、しかも夜間に特に視認される目標物であるといえる。

このように、離れ岩、岬や湾、天体を観察する視点にはそれぞれ差異があり、この差異が目標物への命名に作用する場合もある。

景観、つまり目標物と、サマ集団や他集団との関係について、まず岬や湾にみられた由来不

明の語彙を例に検討する。

K村の漁師らへの聞き取り調査では、岬の方名のうち由来不明のものについて、「サマ語であるが分からない（昔のサマ語であろう）」あるいは「バンガイ語である」、「国の言葉（インドネシア語）である」などの表現がたびたび聞かれた。これらは実際に「古い」サマ語である可能性も否めない。一方で、岬付近に先住したバンガイ人など、他民族の言語を借用し、その意味や由来については現代まで共有されてこなかった結果とも考えられる。いずれにせよ、K村のサマ人には、由来の分からない名称の岬や湾があっても、新たにサマ語の方名をあてようとするような傾向はみられず、分からない名称をそのまま踏襲している。このことは、特徴が変化した離れ岩トゥコー・マンディラオ（トゥコー・海にある）に対して、新たにその特徴を反映した名称、トゥコー・マアッポ（トゥコー・折れた）と命名する行為とは、目標物の方名や特徴への関心の高さが異なることを示唆している。つまり、岬や湾の方名への関心度は、離れ岩へのそれと比べると高くないといえる。

他方、離れ岩は、陸地に先住してきた他民族からは物理的に距離があったことは自明である。現代においても、K村のサマ人漁師が利用する漁場は、バンガイ諸島域の他集落のサマ人漁師たちが利用することはあっても、非サマ人が利用することはない。したがって、離れ岩はサマ人漁師たちに固有な生活空間の一部であるため、詳細な由来とともに現代までサマ語の名称が共有されてきたと考えられる。

天体についてみると、天体の方名のうち由来不明のものはニヨール *Niyor*（アルデバランまたはシリウス）のみであり、そのほかの方名は全てサマ語である。K村のサマ人漁師らによれば、他民族の漁師とは漁場が異なるため、天体が目標物として機能する夜間に、非サマ集団と遭遇することはほとんどなく、遭遇しても言葉を交わすことはないという。他方、夜間の出漁中に集落内外のサマ人と遭遇することは日常的であり、既知の仲でなくとも漁獲や天候、漁場について言葉を交わすことがあるという。このように出漁中のサマ人同士の会話のなかで、目標物のひとつである天体に言及された結果、サマ語の方名が共有されてきた可能性も指摘できる。本稿では詳しい説明は述べないが、天体が、漁撈活動に必要な目標物としてだけでなく、サマ人の認識する季節観の構成要素であるなど、時空間的に重要な役割を果たしていることも、天体の方名がほぼ全てサマ語であることと、無関係ではないと考えられる。

このように、目標物の命名や民俗分類の背景には、目標物の見え方の差異と、サマ集団や非サマ集団の利用する生活空間との関係があることが明らかになった。具体的には、離れ岩や天体は、サマ人漁師たちにのみ利用される景観であるため、詳細な由来とともに現代までサマ語の名称が共有されてきたと考えられる。他方、岬や湾は、視認する地点が比較的遠い距離にあるため、サマ人漁師らは微細な違いを認識しない。現代のサマ人漁師にとっては曖昧な名称であり、岬や湾の方名への関心度は、離れ岩へのそれと比べると高くないといえる。

V 魚類・漁場・目標物の語彙の関連性

ここでは、これまでみてきた魚類・漁場・目標物について、命名行為における、それぞれの要素間の関係性を分析することで、サマ人漁師による民俗分類の特徴を検討する。図9では、ある要素の民俗分類が他の要素へ影響を与えている事例が確認されたものを、実線で示す。(a) (a') は漁場と魚類の関係を、(b) (b') は漁場と目標物の関係を、(c) (c') は目標物と魚類の関係を表す。

図9における (a) から (c') に該当する事例を表9に示す。

表9をみると、(a) (a') 漁場と魚類は互いの命名に影響を与えていることが分かる。一方、(b) 目標物の名称は漁場の命名に影響を与えるが、(b') 漁場の名称が目標物の命名に影響を与えた例は確認されず、また (c) 魚類の名称は目標物の命名に影響を与えるが、(c') 目標物の名称が魚類の命名に影響を与えた例は確認されなかった。

まず (b') 漁場の名称が目標物の命名に影響を与えた事例がみられない理由を検討する。K

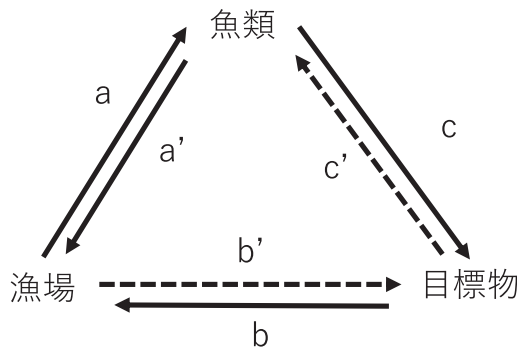


図9 魚類・漁場・目標物の命名の関係図
出所：現地調査より筆者作成。

表9 図9におけるそれぞれの事例

番号	サマ語 (仮名)	サマ語 (アルファベット)	意味
a	ンドー・シッラー	<i>nddoh sillah</i>	シッラー (外洋) のンドー (ウツボ科)
a'	ラナ・カレオ	<i>Lana kareo</i>	サメのラナ (漁場)
b	ラナ・トロー・マジュレー	<i>Lana Toroh Majureh</i>	マジュレー岬のラナ (漁場)
b'	該当なし	該当なし	該当なし
c	トゥコー・インガタン	<i>Tukoh Ingatang</i>	インガタン (魚種) のトゥコー (離れ岩)
c'	該当なし	該当なし	該当なし

出所：現地調査より筆者作成。

村住民に利用される離れ岩は、そのほとんどが複数の漁場へ繋がる航行ルートに位置する。そのため、特定の漁場の名前が離れ岩の命名に影響を与えるとは考えにくい。また、漁師は目標物を比較的近距离で観察するので、その形態の特徴により関心が集まる。岬や湾も同様に、複数の漁場の位置特定に必要な目標物であるため、特定の漁場の名前が付与されなかったと考えられる。天体は単体で利用しても漁場へ到達できないため、特定の漁場の名称が付与されるのは考えにくい。

次に(c') 目標物が魚類に影響を与えた事例が発生しない理由を検討する。たとえばトゥコー・インガタン *Tukoh ingatang* は、インガタン(魚種)が多く生息する離れ岩(トゥコー)であることに由来する。しかし、この魚種はこの離れ岩にしか生息しないわけではない。したがって、離れ岩を「インガタン(魚種)の生息する」と形容することはできても、インガタン(魚種)を「○○トゥコーに生息する」と形容することはできない。他方、ンドー・シッターは外洋域(シッター)に生息するウツボ科の複数種(ンドー)であることに由来する。この場合、ンドーを「シッターに生息する」と形容して差し支えない。

以上のように、魚類・漁場・目標物の関係性について、民俗語彙の命名を通して総合的に捉えると、魚類—漁場は互いに影響を与えることがあるが、目標物—漁場、目標物—魚類は一方的な影響しかみられないことが指摘できる。

魚類・漁場・目標物の関係性は、必ずしもそれぞれが相互に影響し合っているわけではない。しかし、自然物(魚類・目標物)—空間(漁場)という関係性でみれば、これは不可分な関係にあるといえる。たとえば、実際にはマタンガ村の側になくともその名前を冠する漁場ラナ・マタンガのように、自然物や空間の一方だけを分析していても、文字通りにそのものを指すとは限らないのである。

また、魚類・漁場・目標物それぞれの語彙については2つの傾向がみられた。まず魚類や漁場、目標物のうち離れ岩と天体の語彙について、K村のサマ人漁師らは、ほぼ全てがサマ語であると認識しており、その意味を説明できる。漁場の一部には「マジュレー岬のティンプス」など由来不明の名称があるが、これらは正確に言えば、岬や地名の語彙が由来不明なのである。これに対して、目標物のうち岬や湾については、由来不明、または「古いサマ語」や「バンガイ語」であるとするなど、少なくとも現代のK村のサマ人漁師が意味を認識していないものが顕著であった。

前者の傾向に共通しているのは、サマ人漁師が特に関心を払って観察し、利用していること、また他の言語から借用する機会があまりないことである。漁場や離れ岩、天体は、K村のサマ人漁師が特に注意深く観察して、漁獲を得るために利用する知識である。すでに述べたように、K村のサマ人漁師の利用する漁場は、非サマ人には利用されないため、漁場やその到達に必要な知識について情報を互いに共有することは稀であると考えられる。魚類の名称をやりとりす

る場面では、ほとんどの場合、K村内の市場でサマ語を用いて取引されるか、サマ語を解する非サマ人でK村在住の仲買人によって取引される。以上のことから、漁場や離れ岩、天体の民俗語彙は、K村のサマ人漁師にとって関心度が高く、コミュニティ内に比較的閉じられた知識であるといえる。

後者の傾向に共通しているのは、距離的にも、また感覚的にもK村のサマ人漁師からは離れており、前者の対象物ほどは関心が高くないこと、他の民族が歴史的に先に利用するということである。岬や湾そのものに滞在することは稀であり、これらは一般に遠く離れた沖合から観察するものである。バンガイ諸島域におけるサマ人の定住化とバンガイ人の歴史については、不明なところが多い。先住していたバンガイ人が、先に岬や湾に名称をつけ、後から移住してきたサマ人がその名前を借用した可能性も十分にある。実際に、サマ人が「バンガイ語である」と認識するような島の名前も存在する。しかし一方で、前者の対象物と比べれば、バンガイ人のほうがより関心を払い、利用していた可能性も捨てきれない。岬や湾はいわば陸と海の境界に位置する対象物であり、それを海から見ていたサマ人と、陸から見ていたバンガイ人では、対象物への距離は大きく異なる。以上のことから、岬や湾の民俗語彙は、K村のサマ人漁師にとっては比較的関心度の低い知識であるといえる。

このように、K村のサマ人漁師の認識する魚類・漁場・目標物の民俗分類を総合的に捉えると、関心度のより高いものと低いもの、またその中間程度のものがあり、これらは外洋で漁をおこなうサマ人の視点に基づく景観認識に類する特徴であることが示唆された。この特徴は、沿岸性漁撈をおこなう人びとの景観認識とも異なる。これをふまえて本研究の意義に立ち返ると、本稿は、海についての従来の民俗分類の研究が、沿岸部の漁撈活動に注目していたことや、一部の目標物のみに注目していたこと〔秋道 1985; 篠原 1995; 須藤 1992; 高橋 2004; 卯田 2000; 上野 2004; 安室 2013〕を受けて、海から見た景観に基づく、魚類・漁場・目標物を総合的に捉えた初の試みであるといえる。

VI おわりに

本研究では、魚類・漁場・目標物など複数の知識を用いて外洋漁撈をおこなうバンガイ諸島のサマ人に着目し、これらの知識が関連づけられて理解されていることについて、民俗分類や命名方法を切り口として明らかにした。これまで魚類・漁場・目標物については、それぞれが切り離された要素として民俗分類の研究が進められてきた〔秋道 1985; 篠原 1995; 須藤 1992; 高橋 2004; 卯田 2000; 上野 2004; 安室 2013〕。しかしながら本研究は、実際には漁師が魚類・漁場・目標物など自然物と空間を複合的に組み合わせて理解していることを実例とともに明らかにした。また、これだけでなく、バンガイ諸島のサマ人の民俗分類の分析により、他の民族と

の交流が、サマ人が形成してきた民俗語彙などの言語分野にも影響を与えた可能性を示唆することも示した。また、外洋域からの景観に基づいて民俗分類が認識されていることを明らかにした。これは、それぞれの民族の利用する自然環境に引きつけて彼らの認識を理解するべきであることを改めて示した事例といえる。

こうした分析結果を得た一方、サマ人は、広範囲に拡散居住している特徴から [長津 2018], サマ語自体にも複数の方言があり [長津 2009; Grimes and Grimes 2000], その背景には環境条件の差異がある可能性も否めない。環境条件が異なると、その地域で利用される漁法や、漁に利用する空間が異なるだけでなく、漁師の目にうつる景観も大きく異なる。そのため、同じ民族、同じ「サマ語」であっても、各地域に対して、それぞれ異なる民俗分類が形成されていると考えるべきである。今後、異なる環境条件の複数地域で魚類・漁場・目標物の民俗分類を総合的に捉えることで、彼らの環境認識や知識により迫ることができるだろう。さらにいえば、現代のサマ人は、自然災害や人口増加などの要因から、異なる環境条件の別の集落へ移動することもある。また、K村では若年層がダイナマイト漁に従事し、従来の漁法を継続するのは比較的年配の漁師であるといった傾向もみられる。このように、集落の移動や、利用する漁法の差異によって、どのように民俗分類に差があらわれるのか、何が共有され、何が変容していくのかといった問題も、現代のサマ人の環境認識を捉える重要な手がかりとなる。

さらに留意すべきは、言語に表れない知識の検討である。本稿では、方名として表れたものを分析対象として論じた。しかしながら、本研究が対象とする地域においても、あるひとつの名前に包括されている漁場が、実際には複数の漁場を指していることもある。

ひとの環境認識は、当然ながら一枚岩ではなく、複雑にからみあって形成されている。本研究から指摘できることは、ひとの複雑な環境認識をひとつひとつ紐解いて理解しようとするときに、分解したいくつかの紐を束ねて分析することではじめて明らかになる相互作用の重要性である。環境条件や社会的背景の多様性、さらに近代化によっても、今後さまざまな変容が起こると考えられるが、そこに今日における環境認識を研究することの可能性はある。

謝 辞

本研究の現地調査に際しては、インドネシア共和国科学技術省 (RISTEK) より調査許可 (許可番号: S/256/E5.4/KI.05.00/2020) を発行いただいた。バンガイ諸島の方々にも心よりお礼を申し上げる。研究に際しては、国立ハサメディン大学の Dadang Ahmad Suriamihardja 教授、講師の Nur Hasanah 先生、東洋大学の長津一史教授からご協力を賜り、学術的なご助言をいただいた。また、本研究のための調査は、独立行政法人日本学生支援機構奨学金、京都大学学際・国際・人際融合事業「知の越境」融合チーム研究プログラム (SPIRITS) (平成 28 年度採択、代表: 古澤拓郎)、旅の文化研究所第 24 回公募研究プロジェクト (採択課題「国境なき海域ネットワークと漁撈知に基づく『漂海民』バジャウの移動に関する研究」)、2017 年度平和中島財団日本人留学生奨励学生の助成によっておこなわれた。英文校閲は Wordvice 社にご協力いただき、科学研究費補助金 (研究奨励費 820191300006) の助成を受けた。これらの機関ならびに関係者の方々に感謝申し上げます。

参考文献

- 秋道智彌. 1984. 『魚と文化——サタワル島民族魚類誌』東京：海鳴社.
- . 1985. 「サタワル島における伝統的航海術の研究——島嶼間の方位関係と海域名称」『国立民族学博物館研究報告』9(4): 651-709.
- . 1995. 『海洋民族学——海のナチュラリストたち』東京：東京大学出版会.
- 青山和佳. 2006. 『貧困の民族誌——フィリピン・ダバオ市のサマの生活』東京：東京大学出版会.
- 福井勝義. 1991. 『認知と文化——色と模様の民族誌』認知科学選書 21. 東京：東京大学出版会.
- 後藤 明. 1999. 「ポリネシア語の魚名とその文化史的位置づけ——東部ポリネシア語を中心に」『オーストロネシアの民族生物学——東南アジアから海の世界へ』中尾佐助；秋道智彌（編），267-294 ページ所収. 東京：平凡社.
- 灰谷謙二. 2009. 「出雲地方の漁業集落の風土語彙と漁場確定語彙——出雲市伊津町方言からみる開放系漁場の特徴」『尾道大学日本文学論叢』5: 21-35.
- . 2011. 「漁場の地理的環境と漁場特定語彙」『尾道大学日本文学論叢』7: 15-25.
- 五十嵐忠孝. 1977. 「トカラ列島漁民のヤマアテ——伝統的漁撈活動における位置測定」『人類学講座 12 巻 生態』渡辺仁（編），pp. 139-161 ページ所収. 東京：雄山閣.
- 今里悟之. 2011. 「民俗分類としての田畑の筆名——命名の基準と空間単位」『国立歴史民俗博物館研究報告』162: 123-139.
- 香月洋一郎. 2000. 『景観のなかの暮らし——生産領域の民俗（改訂新版）』東京：未来社.
- 益田 一他（編）. 1984. 『日本産魚類大図鑑《図版》』東京：東海大学出版会.
- 松井 健. 1983. 『自然認識の人類学』東京：どうぶつ社.
- . 1989. 『琉球のニュー・エスノグラフィー』神戸学院大学教養部人間科学研究叢書. 京都：人文書院.
- . 1991. 『認識人類学論攷』京都：昭和田.
- 長津一史. 1995. 「フィリピン・サマの漁撈活動の実態と環境観——民俗環境論的視点から」京都大学人間・環境学研究所文化・地域環境学専攻修士学位申請論文
- . 1997. 「海の民サマ人の生活と空間認識——サンゴ礁空間 *t'ba* の位置づけを中心にして」『東南アジア研究』35(2): 261-300.
- . 2008. 「サマ・バジャウの人口分布に関する覚書——スラウェシ周辺域を中心に」『アジア遊学』113: 92-102.
- . 2009. 「境域の言語空間——マレーシアとインドネシアにおけるサマ人の言語使用のダイナミクス」『多言語社会インドネシア——変わりゆく国語、地方語、外国語の諸相』森山幹弘；塩原朝子（編），183-212 ページ所収. 東京：めこん.
- . 2012. 「異種混溶性のジェネオロジー——スラウェシ周辺海域におけるサマ人の生成過程とその文脈」『民族大国インドネシア——文化継承とアイデンティティ』鏡味治也（編），249-284 ページ所収. 東京：木犀社.
- . 2018. 「東南アジアにみる海民の移動とネットワーク——西セレベス海道に焦点を置いて」『海民の移動誌——西太平洋のネットワーク社会』小野林太郎；長津一史；印東道子（編），148-177 ページ所収. 京都：昭和田.
- 中坊徹次（編）. 2013. 『日本産魚類検索——全種の同定』神奈川：東海大学出版会.
- 中野真備. 2018. 「中部スラウェシ・サマ人の漁撈知——時空間利用の技術に着目して」京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻博士予備論文.
- . 2019. 「インドネシア・バンガイ諸島のサマ人の漁撈における天体利用」『天文学と人類学の融合——それぞれの大地、それぞれの宇宙（公開シンポジウム講演録）』（じゅんるいけん Booklet 2019 vol. 4），39-52 ページ所収. 愛知：南山大学人類学研究所.
- . 2020. 「インドネシア・バンガイ諸島のサマ人の外洋漁撈と空間認識」『アジア・アフリカ地域研究』19(2): 184-206.
- 中野 泰. 2003. 「シロバエ考——底延縄漁師の漁場認識とフォーク・モデルの意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』105: 215-266.
- 奥谷喬司（編）. 2000. 『日本近海産貝類図鑑』東京：東海大学出版会.
- 小野林太郎. 2007. 「ボルネオ島サマ人による漁撈の『近代化』と『伝統』——陸サマと海サマによる漁撈

- の比較をととして『国立民族学博物館研究報告』31(4): 497-579.
- . 2011. 『海域世界の地域研究——海民と漁撈の民族考古学』京都：京都大学学術出版会.
- 大塚柳太郎；河辺俊雄；高坂宏一；渡辺知保；阿部 卓. 2000. 『人類生態学 第2版』東京：東京大学出版会.
- 崎山 理. 1999. 「マダガスカルの植物命名法」『オーストロネシアの民族生物学——東南アジアから海の世界へ』中尾佐助；秋道智彌（編），125-151 ページ所収. 東京：平凡社.
- 関戸明子. 2000. 『村落社会の空間構成と地域変容』東京：大明堂.
- 篠原 徹. 1995. 『海と山の民俗自然誌』東京：吉川弘文館.
- 須藤健一. 1992. 「星と波と風と——マイクロネシアの伝統的航海術」『エコロジカル・マインド——生活の認識』（現代のエスプリ 298）佐々木正人（編），98-109 ページ所収. 東京：至文堂.
- 高橋そよ. 2004. 「沖縄・佐良浜における素潜り漁師の漁場認識——漁場をめぐる『地図』を手がかりとして（含コメント）」『エコソフィア』14: 101-119.
- . 2014. 「魚名からみる自然認識——沖縄・伊良部島の素潜り漁師の事例から」『地域研究』13: 67-94.
- 多紀保彦；奥谷喬司；武田正倫（編）. 2000. 『食材魚貝大百科 全4巻』東京：平凡社.
- 床呂郁哉. 1992. 「海のエスノヒストリー——スルー諸島における歴史とエスニシティ」『民族学研究』57(1): 1-20.
- 卯田宗平. 2000. 「琵琶湖における船上からの陸地景認識に関する研究」『ランドスケープ研究』64(5): 751-754.
- . 2003. 「ヤマアテと GPS ——技術を越境する漁師たち」『現代民俗誌の地平 1 越境』篠原徹（編），169-190 ページ所収. 東京：朝倉書店.
- 上野智子. 2004. 『地名語彙の開く世界』大阪：和泉書院.
- 安室 知. 2005. 『自然を生きる技術——暮らしの民俗自然誌』歴史文化ライブラリー（204）. 東京：吉川弘文館.
- . 2013. 「百姓漁師の漁場認識——ネ（根）の命名をめぐる」『国際常民文化研究叢書 1 ——漁場利用の比較研究』, 15-45 ページ所収. 横浜：神奈川大学国際常民文化研究機構.
- . 2014. 「再考、魚名の研究——アワビの民俗分類と商業論理」『国立歴史民俗博物館研究報告』181: 165-204.
- . 2016. 『自然観の民俗学——生活世界の分類と命名』東京：慶友社.
- 矢崎真澄. 2003. 「沿岸漁民による漁場認知の重層性に関する研究——伊豆半島東南方『シマウチ（シマナカ）』海域の場合』『地理学評論』76(2): 101-115.

外国語文献

- Akamine, Jun. 1997. Notes on Sinama Languages: Phonology, Orthography, and Wordlist. *The Journal of Sophia Asian Studies* 15: 3-39.
- Akamine, Jun; and Nagatsu, Kazufumi. 2007. *Word and Sentence List for Sama/Bajau Languages*. Sulawesi Area Studies: Kyoto University & Universitas Hasanuddin. http://sulawesi.cseas.kyoto-u.ac.jp/final_reports2007/article/47-akamine.pdf (2020年7月1日最終閲覧)
- Akimichi, Tomoya. 1991. Sea Tenure and Its Transformation in the Lau of North Malaita, Solomon Island. *South Pacific Study* 12(1): 7-22.
- Ammarell, Gene. 1999. *Bugis Navigation*. New Haven: Yale University Southeast Asia Studies Program.
- . 2002. Knowing When to Set Sail: Practical Knowledge and Simple Heuristics in Bugis Navigational Strategies. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 158(2): 191-223.
- . 2008. Astronomy in the Indo-Malay Archipelago. In *Encyclopedia of the History of the Science, Technology, and Medicine in Non-Western Cultures*, edited by Helaine Selin, pp. 324-333. Berlin and New York: Springer.
- Ammarell, Gene; and Tsing, Anna Lowenhaupt. 2015. Cultural Production of Skylore in Indonesia. In *Handbook of Archaeoastronomy and Ethnoastronomy*, edited by Cliver L. N. Ruggles, pp. 2207-2214. Springer Science+Business Media. New York: Springer.
- Berlin, Brent. 1972. Speculations on the Growth of Ethnobotanical Nomenclature. *Language in Society* 1(1): 51-86.
- . *et al.* 1968. Covert Categories and Folk Taxonomies. *American Anthropologist* 70(2): 290-299.
- . *et al.* 1973. General Principles of Classification and Nomenclature in Folk Biology. *American Anthropologist*

- 75(1): 214–224.
- Casiño, Eric S. 1976. *The Jama Maḥun: A Changing Samal Society in the Southern Philippines*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Conklin, H. C. 1962. Lexicographical Treatment of Folk Taxonomy. *International Journal of American Linguistics* 28(2): 119–141.
- Ellen, R. 2006. Local Knowledge and Management and Sago Palm (Metroxylon sagu ROTTBOLL) Diversity in South Central Seram, Maluku, Eastern Indonesia. *Society of Ethnobiology* 26(2): 258–298.
- Eward, Lieske; and Myers, Robert. 2001. *Reef Fishes of the World*. Revised Edition. Harpercollins Publishers.
- Forth, Gregory. 2004. *Nage Birds: Classification and Symbolism among an Eastern Indonesian People*. New York: Routledge.
- . 2016. Eastern Sumbanese Bird Classification and Nomenclature: Additions and Revisions. *Ethnobiology Letters* 7(1): 45–52.
- Franco, F. M. et al. 2015. Ethnotaxonomic Systems Can Reflect the Vitality Status of Indigenous Language and Traditional Knowledge. *Indian Journal of Traditional Knowledge* 14(2): 175–182.
- Grimes, Barbara F.; and Grimes, E. Joseph. 2000. *Ethnologue: Languages of the World with Maps and Indexes*, 14th edition. Dallas: Summer Institute of Linguistics.
- Hidayati, S.; Suansa, N. I.; Samin; and Franco, F. M. 2017. Using Ethnotaxonomy to Assess Traditional Knowledge and Language Vitality: A Case Study with the Urang Kanekes (Baduy) of Banten, Indonesia. *Indian Journal of Traditional Knowledge* 16(4): 576–582.
- Irawan, B.; and Muhartati, E. 2019. Identifikasi Nilai Etnosains Pada Kearifan Lokal Berkarang dan Menyondong Ikan Pada Masyarakat Pesisir Bintan. *Pedagogi Hayati* 3(1): 53–58.
- Iwakiri, S.; and Mantjoro, E. 1992. Traditional Marine Tenure in Indonesia: A Study in Sangihe Islands. *Bulletin of Kagoshima Prefecture College* 43: 1–23.
- Jocano, F. Landa; and Veloro, Carmelita E. 1976. *San Antonio: A Case Study of Adaptation and Folk Life in a Fishing Community*. UP-NSDB Integrated Research Program, Office of the Vice-President for Academic Affairs, Office of Research Coordination, University of the Philippines.
- Kemkens, Lotte. 2009. Living on Boundaries: The Orang Bajo of Tinakin Laut, Indonesia. Bachelor's Thesis Social Anthropology, University of Utrecht.
- Kuiter, Rudie H.; and Debelius, Helmut. 1994. *Southeast Asia Tropical Fish Guide: Indonesia, Philippines, Vietnam, Malaysia, Singapore, Thailand, Andaman Sea*. Frankfurt: IKAN-Unterwasserarchiv.
- Lieske, Ewald; and Myers, Robert. 2002. Collins Pocket Guide: Coral Reef Fishes, 2nd Revised Edition. London: HarperCollins Publishers.
- Mantjoro, E.; and Akimichi, T. 1996. Sea Tenure and Its Transformation in the Sangihe Islands of North Sulawesi, Indonesia: The *Seke* Purse-Seine Fishery. *Senri Ethnological Studies* 42: 121–146.
- May, D. 2005. Folk Taxonomy of Reef Fish and the Value of Participatory Monitoring in Wakatobi National Park, Southeast Sulawesi, Indonesia. *SPC Traditional Marine Resource Management and Knowledge Information Bulletin* 18: 18–24.
- Moesinger, A. 2018. Catching Names: Folk taxonomy of Marine Fauna on Takuu Atoll, Papua New Guinea. *SPC Traditional Marine Resource Management and Knowledge Information Bulletin* 39: 2–14.
- Mulyanto, D. et al. 2020. Folk Name and Lore of Birds from the Sundanese of West Java, Indonesia: An Ethno-ornithological Survey. *Biodiversitas* 21(9): 4384–4395.
- Nimmo, H. Arlo. 1968. Reflections on Bajau History. *Philippine Studies* 16(1): 32–59.
- Pallesen, A. K. 1985. *Culture Contact and Language Convergence*. Linguistic Society of the Philippines Monograph Series, No. 24. Manila: Linguistic Society of the Philippines.
- Sather, C. 1985. Boat Crews and Fishing Fleets: The Social Organization of Maritime Labour among the Bajau Laut of Southeastern Sabah. *Contributions to Southeast Asian Ethnography* 4: 165–214.
- . 1997. *The Bajau Laut: Adaptation, History and Fate in a Maritime Fishing Society of South-eastern Sabah*. Kuala Lumpur and London: Oxford University Press.
- Sopher, David E. 1977 [1965]. *The Sea Nomads: A Study of the Maritime Boat People of Southeast Asia*. Reprinted in 1977 with postscript. Singapore: National Museum of Singapore.
- Stacey, E. N. et al. 2012. Prospects for Whale Shark Conservation in Eastern Indonesia through Bajo Traditional Ecological Knowledge and Community-based Monitoring. *Conservation and Society* 10(1): 63–75.

- Sudo, K. 1984. Social Organization and Types of Sea Tenure in Micronesia. *Senri Ethnological Studies* 17: 203–230.
- Ueda, Y.; Ito, S.; and Higuchi, H. 2016. Folk Taxonomy and Uses of Non-indica Mangoes (*Mangifera* spp.) in Java Island. *Tropical Agriculture Development* 60(3): 200–203.
- Whitten, Tony; Henderson, Gregory S.; and Mustafa, Muslimin. 2012. *The Ecology of Sulawesi*. The Ecology of Indonesia Series, Vol. 4. Hong Kong: Periplus Editions.
- Youngman, Scott. 2005. *Summary of Bajau Lexicostatistics Project (through October 1989)*. Dallas: SIL International.

Web サイト

FishBase. <https://www.fishbase.se/search.php> (2020年7月1日最終閲覧)

(2020年11月5日 掲載決定)